
寒椿

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寒椿

【Zコード】

Z5907D

【作者名】

海士龍

【あらすじ】

大伴直久。14歳。人間離れした一族に生まれた、ごく普通の少年。彼の溺愛する双子の弟の数久と、犬猿の仲であるいとこのゆずるは人間離れした力を持っている。その力を使って、世のため、人のため、人外対策専門『なんでも屋』なあんてものをやっている。今回の依頼は雪国からのSOSだ！

1・まだずいぶんと現実、いや、現代離れした話だなあ

あの子と私、どじが違うところのだらうへ。
同じ顔。同じ声。

どうして、私じゃないの?
どうして、あの子なの?
私のどじがダメなの?
なぜ?

私は何のために生まれてきたのだらう?

私はあの子の鏡ではない。
私はあの子の影ではない。
私は私。
私はこじ。
ここにいるから。
だから、私を見てよー。

どうして私は一人いるの?
どうして?
なんで?

辺り一面が真っ白い。

東京では、ちょっとお皿にかかる銀世界に、思わずバスの窓

から身を乗り出した。

「うおおおおおおおお。すっげえー。おい、すげえよ」

そう叫んでから、直久は、彼の双子の弟に振り返る。双子の弟
数久は呆れたような声を漏らした。

「直ちゃん、みつともないよ。それに危ないから……」

と、兄の体をバスの中に引きずり戻す。だが、直久は、すぐにそ
の躰を再び窓から乗り出させた。

「大丈夫だつて。知つてんだろ？　俺の神憑り的な運動神経の良さ
を。心配すんなつて。　はあ、マジいい眺め。これが本当の銀世
界つてやつだな。うん」

などと言つてやると、数久は心の底から呆れ返つて、ため息をつ
いた。

彼は、危ないよ、と言つ前にみつともないと言つたのだ。だが、
そんな言葉、直久には聞こえない、聞こえない。最愛の弟が自分を
心配してくれたということだけで、頭が一杯だつた。

直久は冷たい空気を口一杯吸い込んで、再び叫んだ。

「走りてえー」

まだ踏みつけられていらない雪を口にして、その上を思いつきり走
り回りたいという衝動に駆られていた。

自分だけの足跡を残したり、寝ころがつたり、シロップなん
かをぶつかけて食えたら、最高だよなあ。

半ばうつとりと雪景色に魅入る。

すると、今まで読書をしていた人物が、我慢ならんと、遂に口を
割つた。

「小学生か、お前は。雪見て、無条件に喜ぶな」

同じ年のいとこ、ゆするである。

「一緒にいるこっちの身にもなれ。恥ずかしい」

「んだけど、てめえ」

「なんだよ？」

「やめなよ、一人とも」

「だけど、数だつて恥ずかしいだろ？」

「そ、そうなのか」

「つむうるした瞳で見つめれば、数久に言葉はない。

「何とか言ってくれ、数う」

とか、口では言つておきながら、本心を言わせるつもりはまったくなかつた。

それを口にしたら、大泣きしてやると睨む。案の定、優しい弟は何も言わなかつた。

不意に、数久の目が大きく見開かれた。視界に何かが横切る。バス停だ。

「えつ。今、バス停、通り過ぎた……よ……ねえ？」

その声に、直久もゆするも、あわてて窓から身を乗り出した。どんどん小さくなつていくバス停が見える。

「あそこで降りてなきゃ、まずいんでない？」

「……」

沈黙後、乾いた笑いが発生する。いち早く、現実に戻つて来られたのは、数久だつた。

「僕、運転手さんに話してくる」

運転席の方に向かう。

「何、お前、ボケつとしてたんだよ」

「お前がとつぐに、ボタン、押したと思つてたんだよ」

「俺が押してるわけがないだろ。それはお前の仕事だ、雑用！」

「んだと？」

「ああ。悪い、パシリだつたつけ？」

「このつ

「だから、やめなよ！一人とも！」

直久がゆづるの襟元を掴みかかつた時、数久の『待つた』がかかつた。

「降り過ごしたのは、僕が気を付けていなかつたからだから、喧嘩

しないの。ここで降りしても貰えるように頼んだから、早く降りる

準備して

バスがゆっくり減速しているのが分かる。

直久とゆずるは互いの顔を十分に睨み合い、ほぼ同時に目を逸らした。

「で？」

バスが残していく排気ガスを眺めながら、直久は短く声を発した。灰色は次第に薄く、白い景色に溶け込んでいく。

これからどうすんだ？とゆずるに目を向けた。

「一旦、さつきのバス停まで戻るか？」

「その方が確実だけね」

数久は地図に目を落とした。

地図は、人に描いて貰った物で、先程、降り過ごしたバス停から目的地までの道順が簡単に描かれている。

つまり、ここがどこなのか？とか、ここからどう行けばいいのか？といったことは、描いていない。

見渡す限りの銀世界。目印となりそうな物なんて、当然、ないのだ。

「やばくねえ、迷子ジャン。俺ら……」

道は一本道だつたはず。直久は、先程のバス停まで戻ることを提案する。が、数久とゆずるは首を縦に振る様子がない。

なんつーか、ひどく落ち着いたものだ。

「あっちのような気がする」

と、ゆずるが指した方角に数久も頷く。

「うん。僕もそう思う」

「じゃあ、間違いないな。行くぞ」

スタスターと歩き出してしまつ一人を、直久はギョツとして追いかけた。

「ちょっと待てえい」

二人の前に回り込んで、その進みを止める。

「いつたい何の根拠で言つてんだよ？ 下手したらマジ迷子になるんだぜ。しかも雪道を！」

「……」

「遭難なんてヤダよ、俺。明日の新聞に、双子の兄弟とそのいとこ、雪の中、遭難！……なあんて見出しが載つたら、どうしてくれるんだよっ！」

「はつ、何言つてんだ。どけよ。パシリの分際で俺の前に立ち塞がるな！」

ゆずるは直久の肩を押しやろうとしたが、直久はびくともしない。ゆずるはため息をついた。

「あつちの方で嫌な感じがする。それだけだ」

再びゆずるが直久の肩を押しやつた。今度はすんなりと道を開けてやる。

「嫌な感じ？」

直久は不安げな目を数久に向けた。すると、数久はふんわりと笑い返してきた。

実は、この弟といとこは、常人はずれの力を持つていたりする。それは、普通の人人が見えないようなモノを見たり、聞いたり、触れたりする力だ。

それを一般的には靈感とか言つたりするらしいが、よくテレビとかで、ここいらに何年前に亡くなつたじいさんかいますううだの、そんな貴方のために今から除霊をしますううだのつて、そう言つたレベルではない。あ～あ、つまり、何と言つたらいいいんだ？ SF映画のバケモノ退治のレベルに近いというか。

……まつ、とにかく、常識が通じないってことで。

で、二人は、人外対策をメインとしたちょっとした商売みたいな

事をしている。

人外つて言うのはつまり、妖怪とか、元人間だったやつ 要するに、幽靈だな。

対策つて言うのは、主に退治するつてこと。

んで、今回もその商売の仕事で、こんな雪国まで来ている。何でも、とあるペンションのオーナーからの依頼らしい。残念ながら、一般人の俺としては詳しい事情はまだ聞いてないんだよなあ。

そう、俺、大伴直久、^{おおともなおひさ}14歳は、何の力も持つてない一般的中学生である。

おつかしいんだよつ。

だつてよ、俺と数は一卵性の双子なんだぜ。……ま、バケモノじみた力なんて、俺はいらねえけどよ。

けど、やつぱさ～。今みたいに、数とゆずるだけの間で分かちやつてます、つて態度をとられると、ムカツクんだよな。俺だけ仲間外れつて感じで。ゆづるには雑用呼ばれるし。

実際、力のない俺はこの仕事について行くために、何でもやらからという約束をさせられている。

だつてよ。仕事といえども、こりや、旅行だぜ。しかも、そのペンションがスキー場に激近！

こりや、もう、行くつきやないつしょ！

「どうしたの？ 直ちゃん。さつきからおとなしいけど」

数久に声をかけられて、直久は我に返つた。いつの間にか、二人は歩き出していく、その後を無意識のうちに歩いていた。数久が少し首を傾げて直久を覗き込んでくる。

もつとも大切なことを言い忘れていたが、俺の激ラブ数久の顔の造りは大変すばらしくよろしい。

そして、その一卵性双生児の俺はマジかつこいい！

「うんにゃ、ちょっと考え方してただけ」

と答えると、数久はやんわりと微笑む。

これこれ、この微笑みがくせ者なんだよ。この微笑みは、さすがの俺も涙ものだ。数にやんわり微笑まれて落ちねえ奴はいない。激！ マジ！ カわいいのなんのつて。

ふと、数久が空を見上げながら、口を開いた。

「日が落ちる前に着かないとね」

曇り空で、太陽の位置がよく分からぬが、だいぶ薄暗くなつてきている。

「嫌な感じが、どんどん強くなつてきているね。だから、もうすぐ着くと思うよ」

ほとんど独り言のように言った数久に、少し遠慮気味に直久は尋ねた。

「ところで、今回はどういう依頼なわけ？」

嫌な感じと連発されると不安になるではないか。 数久はゆづるの表情をちらりと盗み見る。

「ゆづるに聞かなかつたの？」

「あいつが俺に何を教えてくれるって言つんだよ」

「えつ。じゃあ、何も知らないでついて來たの？」

「クククと頷く直久に数久は明らかに呆れたようである。

「あのね」

数久のゆづくじと話し出した。

遡ること数百年前、ここいらの土地の村人は山の神に対して、生け贋を捧げていた。

そのおかげで、1年の大半を雪に覆われるこの村でも栄えることができたのだと言つ。

「その生け贋は代々、今から行く家の娘がなると決められていたらしいんだ」

「今から行く家って、ペンションか？」

「そうだよ。何でも、生け贋に娘を差し出す代わりに、他の村人か

ら多額の金を受け取っていたらしいんだ。それで現在においても、余るほどの土地を持つてゐるらしいよ。で、タダあるだけではもつたないからって、ペンションを始めたこととしたんだって

「へー」

「元々あつた古い屋敷を改築して、数年前にオープンしたらしいんだけど。……出るんだって」

「出る?」

「生け贋にされた少女たちの幽霊が！」

「マジ?」

「そのオーナーの話だとね。そのせいで、お客が全然来なくなっちゃつたんだってさ」

「ま、普通そつなるな。で、困つちやつて依頼して來たつてわけだ」

「そんなどこ」

「生け贋ねえ～。まだずいぶんと現実、いや、現代離れした話だなあ。

待て待て、とこりひとは、数やゆするの言つ嫌な感じじつてやつは、
生け贋にされた少女たちの靈?

マジっすか!

「なあ」

やつぱし、俺、帰らせていただきます。

そう言いかけた時、ゆずるの野郎が指差して、着いたとかほざくもんだから、言つタイミングを逃してしまった。つて、マジかよ着いたつて、おいつ。まだ心の準備ができてないつてば。

そこには靈感なんて大層なものがなくとも何かいると思わせるような、そんな陰氣で、巨大な建物が立ちはだかっていた。

2・見えるのか？見えないのか？

差し出された手から、マグカップを受け取り、その人物を見上げた。

ふわふわっとした感じの可愛い女の子で、年は俺たちと同じで、14歳。

この美少女の名前は、妃緒ちゃん。

妃緒ちゃんには、紫緒さんっていうお姉さんがいるんだけど、もう！ これが儘い感じで、激！ 僕好み！

俺らより年上の16歳。俺つてば、ストライクゾーン広いから、年上でも全然OKさつ。

だた、さつきから、ぼーっとしちゃっているのが気になるけど。

どこを見ているのか分からぬ瞳。さつきから全く身動きしない。人形みたいだ。

色の白い肌や、黒く長い髪からして、さしづめ、日本人形と言つところか。

しばらく紫緒の方に気をとられていた直久だが、妃緒の視線に気付き、彼女の方に振り返った。

妃緒は、直久と数久を見比べていたようだ。

「本当にそつくりなんですね」

しみじみといった風に話しかけてきた。

「珍しいですか？」双子は……」

彼女の遠慮のない視線に眉をひそめながら、数久が聞き返した。

「はい。初めて双子さんにお会いしました。感激です。あのう、ゆずるさんは、よく見分けられますね」

その問いに、ゆずるは肩をすくめる。

「見分けるも何も、数と直久は別人ですから」

「でも、そつくりですよ」

「関係ないでしょう。数は数、直久は直久ですから」

「でも、私にはさっぱり」

元々、ゆずるは女の子を相手にするのが苦手で、特に、こつも食らい付いてくるような娘は大の苦手だった。次第に面倒臭いという表情が露わになってくる。そして、

「鉛筆つて、いろんな種類があるじゃないですか。HとかHBとかBとか……。その違いって分かりますか？」

と、唐突にゆずるは問いかけた。そのあまりの唐突さに妃緒は耳を疑つたようだ。

直久はもちろん、数久でさえその意図がすぐには見えなかつた。「Hの中にも、H、2H、3Hと、8Hくらいまで種類があつて、Bにも同じくらいあるんですよ。さらにHとBの間にFというのがあつて、同じHとBの間に位置するHBとはまた別物なんです。さすがに8Hと8Bの区別は付くでしきうが、HBとFの違いは分からぬでしょ。それでも存在するからには違いがあるつてことであらぬでしょ。その違いが分かる人がいるつてことですよね。そういう人にとって、その違いが分かる人がいるつてことですよ。そういう人にとって、HBはHBでしかないわけだし、FはFでしかないわけですよ。代わりに使うことはできないんです。だけど、違いなど分からぬ人にとって、HBもFも、HもBも、みんな同じなんです。どれを使つてもかまわない」

ゆずるはそこで一息ついて、妃緒の目を真つ直ぐに見つめた。

とたん、彼女の顔が赤くなる。

「つまり何が言いたいかといふと、二人のことを良く知る俺が見分けられるのは当然で、会つたばかりのあなたが彼らを見分けようなど、無理でも仕方がない、と言つことです」

きつぱり言い放つたゆずる。その横で、ため息をつく直久と数久。

もつと柔らかく言えないのかよ、こいつは……。

重い沈黙が辺りに広がつた。

やばすぎる！

そう思つた時、運良くと言つべきか、オーナーが姿を現せた。

「お待たせして申し訳ない」

話の途中で、電話がかかってきたため席を外していたのだが、それを済まし、戻ってきたようだ。

妃緒が席を立つた。本来の話に戻るのなら、自分は邪魔だと思つたらしい。

つかさず、数久が直久の腕を引っ張つた。

「直ちゃん、フォローしてきて」

「はあ？ 僕が？」

「あれじゃあ、かわいそつだよ。お願ひ」

数久のすがるような目つきに、仕方なく直久は腰を上げた。数の頬みじやあ、聞かないわけにはいかないしなあ……と頭を搔いた。妃緒を探してうろうろしていると、視線を感じて、その方を見る。すると、階段に腰掛け、ジッとこちらを見つめている妃緒の姿があつた。

「なんだ、ここにいたのか

そう声をかけると、妃緒は嬉しそうに笑つた。

座つて、と言つようにして、自分の隣をたたく。直久は同じように階段に腰掛けた。

「あのさー」

ゆずるや数久と違つて、同じ年だと思つと、ついタメ口になつてしまつ。

「ゆずるの言つたこと、気にすんなよ。 つーか、何か？ 僕や数は鉛筆かよ！ つて感じだよな。ワケ分かんねえーこと、グダグダ抜かしやがつてさ」

「いいの。その通りだと思うから。だって、一人の区別がつかないつて言つことは、二人の人格、個性を無視していることになるんだもんね。ごめんね」

「……お前、あつたまいいなあ、ああ、そつかーなるほどーそういう

うことになるのかあ」

落ち込んでいた妃緒だが、その明るい声に、思わず吹き出す。

「直久さんつて、おもしろーい
「そうか?」

彼女の笑顔に直久もホッとする。
「でも、いいんですか?」

「ん?」

「抜け出しあきたりして」

「ああ、いいの、いいの。だって、俺、おまけだもん
「おまけ?」

「そう、おまけ。俺ね、見えないんだ、靈とかって。力もないし...」

直久は自分の手のひらを、ジッと見つめる。

どういったわけか、うちの家系は妙な力の保持者が多く生まれる
家系らしい。

俺は、自分自身に何の力もないから、なぜうちがそういう家系なのか?
といった類のことに興味ない。

だから、誰にもちゃんと聞いたことがなくって、よく知らない。
だけど、実際、数やゆずる、親や知っている限りの親戚には、
そういう力があつて、ごく普通に、当たり前のように力を使う。
要するに、うちの家系はそういう血を受け継いでいる……と言つ
か、遺伝子を持っているらしい。

けど、だけど、だつたら、何で俺だけ?

直久は堅く拳を作つた。だが、すぐに緩め、その手のひらを見つ
め直した。

薄く爪の跡がついているのを知ると、苦笑を漏らした。

わずかに頭を左右に振り、直久は妃緒にニッと笑いかけた。

「でも、あいつら一人は、マジすげえの。普通に見えるらしいから。
生きている人間とあんまし変わんないくらいハツキリ見えるらしい

ぜ、幽靈が！」

妃緒の方に身を乗り出す。

「しかも、よくあるジャン。漫画とかでさあー、靈氣の塊を敵キャラに投げつけるのとかって、ああいうのもできぬらじー」「

「ウソ！ 本当？」

あと、他にも、テレパシーとか、触れずに物を動かすとか。瞬間移動やタイムスリップとか……は、疲れるからやらないらしいが。つて、できるんかい！

はあああああ。マジ！ 人間離れしているよなあー。

妃緒相手に弟たちの異様な力について、しゃべりまくっていると、誰かが近づいてくる気配がして顔を上げる。数久が柔らかく微笑んで立っていた。

「直ちゃん、部屋に案内してくれるって」

「もう話、終わったのかよ？」

「うん、だいたいね」

オーナーに連れられて、たどり着いた部屋は2階の南側に位置する部屋だった。

「他に客はおりませんから、お一人で一部屋使ってもかまいませんよ」

そうオーナーは言つてくれたが、数久はやんわりと断つてしまう。

で、結局、ゆずるが一人で一部屋使い、直久と数久は同部屋になつた。

「なんで、ゆずるだけ……」

文句を言い出した直久に、数久はうるんだ瞳を上田使いにして、「直ちゃん、僕と同じ部屋嫌なの？」

と、言つ。

数久の必殺技である。何だかんだ言つて、俺はいつもコレにものすごく弱い。

「な、な、何を言つてんだよ、数！嫌なわけが……」

「僕とより、ゆずるとの方がいいんだね。それとも一人の方がいいの？……僕、何だか、一人で寝るの、怖くって……」

「か、数うー」

数久のその可愛らしさに思わず、ぎゅうっと抱きしめる。

「ぐ、苦しーー」

「もおう、数うつてば、怖がり屋サン。いいさ、今晩はこのまま抱きしめて寝てあ・げ・る」

「けつ、結構ですっ」

「ああ、数うー」

一人いちゃつている直久は、肩越しに、数久がゆずるに向けて片目を閉じ、それに答えるようにして、ゆずるは肩をすくめてみせたことに気付かなかつた。

荷物を部屋に置き、1階のロビーにいく。

そこで、直久は数久から簡単に、この家の事情を説明して貰つていた。

それは、昔々、この家で1番初めに生まれた女の子が16歳になると生け贋にされていたという話だった。

だが、科学の栄える現代において、神様の祟りをおそれで、人身御供をしようと考える者はない。

いつしか、生け贋など必要とされなくなつていった。

そうして、忘れられたのだ。

人身御供のあつたという事実も、生け贋にされた少女たちの存在も。

ところが、それらは、この家の者たちにとっては、遠い記憶のものにはならなかつた。

人身御供をやめてからというもの、この家で生まれた一番初めの女の子たちは、かつて生け贋に出されていた年齢になると、生気が抜けたようになってしまふのだという。

何に対しても反応がなく、自ら動こうとしないのだと言つ。それはまるで、人形のように……。

そうなつて、だいたい一年が過ぎた頃、眠るように死んでしまふ。

直久は紫緒を振り返つた。

彼女は、さつき自分が見とれていた時と変わらぬ様子で、どこかをじつと眺めていた。

オーナーは、ペンションに客が来ないからといふことではなく、娘のことを想つて、依頼してきたのだ。

このままで、死んでしまうかも知れない娘のために。

「実は、私には妹がいました。が、やはり16になつたその日から様子がおかしくなり、17の誕生日の数日後、死んでしまいました。その時の妹の症状と、紫緒の症状が同じなんです。医者にも見せたのですが、原因は分からないと言われ、もひ、どうすることもできません。このまでは、紫緒は……」

それはゆずると数久にとつて、オーナーに言われるまでもないことがだつた。

彼女を初めて目にした時から、彼女の回りに何とも言い表しがたい不気味な気配を感じていたからだ。

「この家の見取り図を見せて頂きたいのですが」

娘の不憫さに涙を潤ませて黙り込んでしまつたオーナーに、哀れんでいる暇はないのだと言いたげに、ゆずるは口が開いた。オーナーは無言で頷いた。手に持つていた見取り図を広げ、ゆずるたちに見せる。

「改築したと言つても、ほとんどいじつていません。昔と大して変わりません」

そう言つと、彼は妃緒を呼ぶ。

「案内して差し上げなさい」

「はい。では、どうぞこちら」

「こいつとして引き受けた妃緒を先頭に、ペンションを一回りする
こととなつた。

大して変わらないつてことは、昔からこんなでかい家かよつ、
いうのが直久の率直な感想だ。

「この西洋風の屋敷が建つたのは、驚いたことに、明治初頭だとい
う。

よほど金持ちだつたんだなあ、と溜め息。

そんな直久のすぐ横で、数久が形のいい眉を少し歪ませる。

「どうしたんだ？」

「うん。ちょっと変だなあ、つと思つて」

「ああ？」

どれどれ、と数久の持つ見取り図を覗き込んだ。

一人の足が止まつたのに、先を歩いていたゆずると妃緒も気付き、
少し戻り、同じように覗き込んできた。

「ここが今いる位置なんだけど……」

細く長い数久の指が、見取り図の上を滑る。それから、目の前の
扉を指した。

「この見取り図には、この扉がないんだ。描かれていみたい」
確かに、その扉は見取り図にはないものだつた。

「ゆづるは何か感じない？」

「嫌な感じがするな」

「うん、僕もそうだよ。それで、さつきから透視しようとしている
んだけど、真っ暗になつちゃつて、ダメなんだ」

「おいつ。ゆずる。お前はどうなんだよ。見えんのか？見えないのか？」

「つむれー。パシリは、まず、黙れ！」

ゆずるが、すうーと田を細める。だが、

「だめだ」

と短く言い放ち、ため息をついた。

聞くところによると、本当ならば、ゆずるは数よりも強い力を持つているらしい。

それはゆずるが、俺らの家である大伴家の本家筋にあたる九堂家の御曹司だからだ。

九堂家は妙な力をもつとも強く受け継ぐ御家なわけで、ゆずるはその九堂家を継ぐようにと定められている。そのため、幼い頃から、完璧に力を使いこなすための特別な教育を受けているのだという。

な、なんじゃあい、その教育つて！ 怪しい。かなりアヤシイ……。

ところが、だ。ゆずるの力はひどく不安定なものなんだ。

都市の一つや二つ、簡単にぶつ飛ばせるほどの力がある時もあれば、全くなくなってしまう時もあるらしい。数の話だと、それは月の満ち欠けに関係があるらしいとか……。

そう言えば、母さんや鈴加なんかも、そんなこと言っていたなあ。

あつ、鈴加つーのは、俺らの姉貴ね。

まあ、そんなわけで、ゆずるは、力が弱まった時の依頼は、かならず数を連れている。

数のフォローが必要な程、使いもんにならない状態だからだ。

……ということで、今のゆずるには、数にできなかつたことがで起きるわけがなく、ゆずるは舌打ちをした。

「何かご存じですか？」

妃緒に問う。妃緒は頭を横に振った。

「私も、たぶん両親も分からないです。この扉はずつと以前から開

けられていないのでですから」「

と、ノブに手をかける。ノブはカチカチと小さい音を立てるもの、一向に回らない。

「何十年も前に鍵をなくしてしまったのだと聞いています。それ以來開かないのです。誰も扉を壊してまで開けようとは思わなかつたようで、開かずの扉として放つておかれています」

「ミステリアス～。　だけど、なんで開けようとしないんだ？」

俺なら何が何でも開けたくなるけどなあ」

「直ちゃん」

「ん？」

直久の「」氣楽な質問に数久は眉をひそめ、妃緒はわずかに強張つた顔になつた。

「この部屋は、生け贅にされた少女たちが使つていた部屋だつたんです」

ああ、それでか。直久は息を呑んだ。何だかやるせない気持ちで、じつとその扉を見つめる。

しばらくあつて、一行はその場を離れた。

それにしても、なんつうー広い家だ！

1階はロビー、食堂や浴場などの他、オーナー一家の部屋がある。さつきの開かずの扉もこの階だ。2階は客室オンリーで、9部屋。3階もやはり客室が4部屋あり、この4部屋は2階のそれとは比べものにならないほど1部屋1部屋がバカ広い。つまり、とってもイイ部屋なわけだ。

イイ部屋過ぎて、未だかつて、それらを利用した客はいないんだとか。

そのせいもあるのか、掃除が行き届いていないような……。廊下の隅に埃がたまっているし、壁もザラついている。それに何だか力ビ臭い。

数久が急に足を止めて廊下の壁に飾つてある絵を指差した。

「この絵は何ですか？」

見ると、3階の廊下の壁には、数メートル置きに、何枚もの絵が飾つてあつた。それも、全て、同じぐらいの年の少女の絵だ。

「これらの絵は、生け贋になつた少女たちの肖像画です。生け贋にされる前、その少女が生きていたという証に、必ず肖像画を描かれることになつていたそうです」

写真のように描かれている彼女たちは、今にも絵から出できそうだつた。何かを語りかけてきそうで、早くその場を立ち去りたくない。

「あれは？」

直久の不安など氣にも止めずに、ゆづるが指差すのは廊下の端。

「あの絵だけ、なぜ離れたところにあるんですか？」

日もあたらないような隅っこにポツンと一枚の絵が飾られている。四人はその絵のもとに歩み寄つた。

白い肌、長い黒髪、黒い瞳、赤い唇。日本人形みたいな少女。

「この少女は最後の生け贋の少女でした。いえ、そうなる予定でした」

妃緒はじつと絵の中の少女を見つめながら話し出した。

「明治時代に入つて、人身御供などやめようと言つのが、大半の村人の声になりました。でも、この少女の父親は、人身御供をやめれば村人から金を集めめる理由がなくなつてしまつと、それらの意見に耳を貸そとせず、断固決行の意を示したのです。そして、代々の生け贋の少女たちにそうしてきましたように、この少女にも肖像画を描き残してやることにしたのです。招かれた絵描きは、まだ若い青年で、絵を描いている長い時間の間、2人は、そのう、……恋に落ちてしまつたそうなんです。ですが、絵が完成すると、少女は生け贋にならなければなりませんでした。それで、この絵が完成した翌晩、2人は逃げ出してしまつたのだと聞いています」

「おおっ。手にいゝ、手をゝ、とつてえゝ。駆け落ちジャン」

格好いいと言わんばかりの直久に、妃緒は苦笑した。

「でも、すぐ見つかってしまつて、2人ともその場で射殺されてしま

「まつたそうですね」

「……」

妃緒はもう一度確認するかのようにその絵を見つめた。少女は白い椿の花が咲く庭で楽しそうに笑っている。その笑顔の先には、この絵を描く青年がいるのだろうか？

ふと、視線を下げると、その絵の下の方に『ツバキ』と書いてあった。

「ツバキって、この娘の名前かな？」

その部分を指しながら数久が妃緒に尋ねると、妃緒はあやふやに頷いた。そして、

「あの、そろそろ夕食の準備が整つていると思うので、食堂の方に行きませんか？」

と、穏やかな口調で促す。さつきから腹ペコの直久は大賛成したのだが、数久はまたもや眉をひそめる。

「どうした？」

それに気付きゆずるが数久に声をかける。数久は今いる場所とは逆方向の廊下の端を指差した。扉がある。

「あの部屋は見ていないなあ、と思つて」

「そう言えば、見てないな」

長い廊下の端から端を見ているせいか、向こう側の端が何だか気味が悪い気がした。

妃緒の方に振り向くと、彼女は何やらずっと遠くを見るような目つきで、その扉をじっと見つめている。

この廊下が薄暗いせいかもしれないが、顔色が悪いように思えた。

「実は、あの部屋に、私とは6つ違ひの兄がいるんです。……
舜と言います。兄は、生まれ持った奇病のため、自分の足で歩くことができません。立つことさえも。それで、ずっとあの部屋に籠もつてゐるんです。人と会うのを極端に嫌がるもので、失礼ですけど、兄のことはそつとしておいてください」

必死な表情で頼まれては、どうすることもできない。仕方なく、
その場は何も言わずに妃緒に従つて階段を下りた。

3・ゆかる、しつかりしー 僕に抱まれー

夕食後、数久は、この屋敷に集まつた浮遊霊を追い払うのだと黙つて、狩衣に着替えている。

狩衣つーのは、平安時代の民間服で、動きやすいことから狩り時の服となり、後、公家の普段着になつたもの。6位以下の正装でもあるんだ。

現在では神官なんかが着ているけど、それを数が着ているからつて、数が神官か何かなのかと云うと、ちょっと違う。ハッキリ言つて、狩衣を着ることに意味はない。

そこを敢えて着るのは、狩衣を着ることで依頼人が安心するから何だつてさー。

普段着でヒヨイヒヨイと御祓いされても、何ら有難味がないといふか。本当に祓ってくれたの？ って、不安になるんだ。

やっぱり、一般的に神官＝和服というイメージが強いらしい。数は、その期待に添つてゐるわけだ。

そこで、浮遊霊というのは、特に悪さをするモノじゃなく、そちら中をふよふよ漂つてゐるだけの霊。

それ自体に意志はなく、何か強い力に引き寄せられて集まつてくることが多い、その強い力というのは大抵、悪霊だ。そして、ソレは引きつけた浮遊霊を吸収してますます力を持ち、かなりやっかいなことになつたりする。

まあ、要するに、浮遊霊は害がなくともいなことに越したことはない存在つてことで、まず、初めに追つ払つてしまつてわけだ。ちなみに、ゆずるに言わせると、浮遊霊は雑魚中の雑魚だそうで、消滅させるなんて、寝てもできるとか……。

それを、数が『消滅させる』ではなく、『追い払う』と言つたのは、数のポリシーが『靈に自ら成仏させる』なもんだからだ。自分

はその手伝いをすれば良く、消滅させたりなどの強制的な除霊はないのだと。だから、意志のない浮遊霊は、文字通り、その場から追い払うのだ。

はあああああああ。数つてば、なんて優しい奴なんだあ。
し・か・も、和服がめっちゃ似合つし、すっげえ、色っぽいの！
目の保養、目の保養と、食い入るよつに見つめていると、数は指
を重ねたり、折つたり、立てたりしている。印を結ぶつてヤツら
しい。ホラ、仏像がよくやつてんじやん。

O・Kのマークとか、影絵で言つキッネさんとか……つて、ちょ
つと違つたかあ？

と・に・か・く、印を結びながら、何かブツブツつぶやいている。

そうすると、数が所有している『式神』つていうのが現れて、数
の命令を聞いてくれるらしい。

『式神』つていうのが何なのか？と言つと、コレが難しい説明に
なる。

『式神』つて言つんだから神様なのかなと言つと、違うだらう。

どちらかと言つと、西洋的に言つて、魔女なんかが使用する『使
い魔』に近いのではないかと思つ。

そもそも古来日本では、何でもかんでも『神』として崇め奉る習
慣があつたわけで、雷とか自然現象はもちろん、石とか山とか自然
物も、はたまた無念に死んでいった人間なんかも『神』だったのだ。

『神』と言つモノは、その怒りを恐れ、敬い、鎮めるモノであつ
たといつ。

『触らぬ神にたたりなし』という言葉があるだろ？

つまり、日本人にとって『神』とは、人々を守ってくれるモノで
はなかつたわけだ。

そりやさあ、気まぐれで助けてくれることもあつただろうけど、

基本的には、『神様』の怒りに触れないようにしててきたわけだ。

そうすると、『神』は善、『魔』は悪という考えはなかつたのだ

ろうと思つ。

そもそも、『魔』つてモノはなく、『悪い神』『意地悪な神』つて感覚だろう。

平安時代には、西洋で言う悪魔的存在、つまり『神』の逆位置の存在として、『鬼』というモノがいる。

だが、鬼も、それより昔は『神』だつたようだ。『鬼』と書いて『カミ』、または『シキ』と読んだのだから。

つまり、人にとって恐れの対象であつた『悪い神』『意地悪な神』は『鬼』となり、都合の良い『神』こそ『神様』になつたと考えられる。そんでもつて、『人間に使役されている神』を『式神』と呼ぶのだ。

ちなみに、一神教で言うと、神は唯一の存在で、絶対であるわけだから、『式神』なんぞ、神とは絶対に認められない。もちろん日本人の感覚からしても、人間の下にいる『神』を崇めることはできない。

よつて、俺的には『式神』は、神ではないつて結論になるつてわけだ。

はあー、長かつたあ。まあ、サラッと聞き流してくれ。

で、数の場合、呪文を唱えると、蒼いオーラみたいなモノが数の全身を包み込んで、それが次第に大蛇の形になつていくんだそうだ。俺には全く見えないけどさ。

その大蛇つーのが、数の『式神』なんだ。たしか、名前は、雲居。

数はその式神を使って、浮遊霊を追い出すつもりらしい。

……で、数はよく、真っ白くつて綺麗な蛇なんだあーとか、人型になると超が百万個付くくらいの美女だよとかつて、背景をピンクに染めながら俺に話してくれるんだけど、だ・か・ら、俺にはサツパリ見えないから！ 俺の分からぬ話をする数は、可愛さ余つて、

憎さ百倍って感じだ。

なあんてことをグチグチ考へているつむこ、回りの空気が軽くなっているのを感じた。

それに、少し明るくなつた氣もある。オーナーたちも体が軽くなつたとか言つてゐるし、相当の量の靈が住み着いていたんだなあ。直久は汗だくになつてゐる数久に、タオルを手渡した。

「ごくろー、じくろー」

「ありがとう」

数久は二コツとしてそれを受け取ると、額を拭いた。

「 つたく、数がこんなにも頑張つているつてーのに、ゆずるのヤツ」

ゆづるは気分が悪いとか言つて、部屋に籠もつてゐる。勝手なヤツだ。数だつて、長時間バスに揺られ、疲れているはずなのにさ。浮遊靈を追い払うつてだけでも、すぐに行動してあげるだけで依頼人は安心できるもんジャン。数はそのことをちゃんと分かつていてから、疲れた体を引きずつてやつてのけたのに。

「 気分が悪いだああああー？ 一々、貧弱ぶんなつてーのー。」

「 つてわけなんだけど、……直ちゃん、聞いてる？」

「あ？」

「 聞いてなかつたんだね」

直久がゆづるへの怒りに燃えている間、数久は直久に何か話しかけていたらしい。

「ゴメン、数。ちょっと今、ゆづるのこと考へてた」

「 そう……」

ふいつと数久は直久から目をそらす。

「 直ちゃん、ゆづることで頭一杯だつたんだね。それで、僕のことなんか、どうでも良くなつちゃたんだね」

だああああああああー。ちがああああうーつ。

「違う違う、数う、違うんだ！」

首が引き千切れるつてほど、頭を横に振ると、数はくすつと笑つ

た。

「じゃあ、もう一度始めから話すね」

「ああ、うん」

話題転換の早さにやや面食らしながら、直久は頷き、数久の話を待つた。その態度良さに満足しながら、数久は話し出した。

「浮遊霊が多くいる時は、霧がかかってたように見えなかつたモノが、追い払うことで、見えてきたんだ。そうして、本当に見えないところが浮き出て分かつてきたつてわけ。霧で真っ黒に塗り潰させたかのようにそこだけが全く見えないんだ。そういう所が、三カ所ある

「三カ所も?」

数久は目を閉じて、拳を口元に持つていく。

「念のために護符をあげた方がいいかな」

護符 要するに、お守りなんだけど。そんなにヤバイ相手なわけか?

数久の言葉に、ギョッとする。

「おいっ、数う」

パチッと開いた大きな瞳を直久に向けて、

「念のためだよ」

と、笑顔で数久は答えた。そして、直久の手を取り、その手のひらに何やら絵文字っぽいものを指で描いた。それをオーナー夫婦や、紫緒さん妃緒さんにもやる。それが済むと、

「念のためですから」

と、再び数久は笑顔を見せた。

その後、時間的には少し早いとは思ったが、ゆづるも数久も疲れが思い切り顔に出ていたので、即、寝床にGOすることとなつた。言つとくが、俺はめちゃ元気だぜ。

あれくらいの道のりじゃあ、バスケットボール部エース大伴直久
サマは疲れんのさ。

つていうか、いつもと違つて感じが氣を高ぶらせちやつて、

眠れねえー。

「数う」

もう眠つてしまつているかも知れないと、遠慮がちに名前を呼ぶ。
すると、数久はその身を少し起こした。

まだ眠つてなかつたのだ。ホッと息を付く。

「何？ 眠れないの？」

「数二や」

「うん。ちょっと、ゆずるが気になつて……」

「ゆづるが？」

数久は、具合が悪いいらしゆずるの「」とが気になつて、眠れない
のだと言つ。

「早く寝ないと、明日辛いんじやねえの？ 本格的に除霊すんだろ
？」

「そうなんだけど……」「

煮え切らない数久の答えに、直久は苛立つ。昔からそうだつた。
数はやたらゆづることを気にする。

ゆづるの我が儘を何でも聞いてしまつし、命令なら犬みたに忠
実だ。

弱みでも握られているんだろうか？

んだつたら、数を溺愛する兄として放つとけないっしゃーゆづる
に文句言つてやらねば！

直久のそんな決意も知らずに、数久は自分の掛け布団を少しだめく
り上げた。

「直ちゃん、こつち来ない？」

「え？」

「一緒に寝よ」

「……何？ マジ怖いの？」

「もういいよ！」

数久は、ガバッと掛け布団を頭から被り、直久に背を向けて寝てしまう。

直久はあわてて自分のベッドから這い出ると、隣のベッドを覗き込んだ。

「数う、直ちゃん、怖くつて眠れなあい」

情けない声を出すと、予想通り数久は振り向いてくれた。再び、掛け布団がめぐり上げられると、今度はおとなしく直久はそこに滑り込んだ。

思えば、幼い頃はこうして一緒に布団でよく眠ったものだ。中学二年生ともなれば、お互に背も伸びるし、一人で一つの布団では窮屈になってしまった。

もしかしたら、全てのことがこうこうになつていいくのかもしない。

二人は一卵性の双子であり、元々一人の人間として生まれてくるはずだつだモノ。

受精卵の時に一つのモノが一つになることが始まり、ソレはこれからどんどん増えていく。

二人の人間の二つの布団、二つの人生。

生まれた時は二人一緒だつたけれど、これからは？

それぞれ別の女の子に恋をして、家庭を持つて、一人で死を迎えるんだ。

数は数で、俺ではないのだから、俺とは違う生き方をするのだろう。

急にしんみりとした直久を不思議そうな瞳が窺う。だが、直久であり得ない数久が、直久のこの気持ち知るよしもなく、

「ねえ、直ちゃん。ゆづることなんだけど」

と言つて、直久の顔をあからさまに曇らせる。

「ゆづる、明日が力を失っちゃう日なんだ。今日も相当弱まつたけれど、明日はまるっきり使えないんだ。ゆづるってね、普段、

力に頼りっぱなしだから、力が弱ると氣まで弱くなっちゃうんだよ。凄く不安みたいで。だから、直ちゃん。ゆずるのこと、気に掛けてあげてね

「だけどよ、あいつ、俺のこと、嫌い……みたいだしさー」

直久は細切れに、吐き捨てるよつと言つた。

「直ちゃんは、どうなの？」

「……」

「直ちゃん、あのね。直ちゃんは、自分は何の力も持っていないと思つてゐるみたいだけど。僕たちは双子なんだよ、絶対にそんなことないし、僕は思うんだ。だつて、直ちゃんがいるだけで、僕は凄く安心するんだもの。ゆずるだつてそうだよ、きっと。だから、直ちゃんはゆづるを嫌わないでね。助けてあげて」

言いたいことを言つと、数久はすうーと眠りに落ちてしまった。勝手なやつだ。俺が自分に逆らえないことを分かつて言つんだ、数は。

何気なく酷いことを可愛い顔をして言つんだ。

一人眠れないまま、どのくらいの時間が過ぎてしまつただろう？直久は天井を睨みつけたまま、すぐ隣から聞こえてくる数久の規則正しい寝息に耳を傾けていた。

トイレ……にでも行つてこよづかなあ。

ベッドから抜け出したその時、小さい悲鳴のようなものを聞いた。隣の部屋、ゆづるの使つてゐる部屋からだ。一瞬どうしたものかと考えたが、次の瞬間にはゆづるの元に駆けだしてゐた。

「ゆづる？」

部屋の中に入った途端、普通ではないものを直久は感じ取つた。

未だかつて感じたことのない大きな不安に襲われる。鼓動が早くなる。息苦しい。

何だ？ この感じ……？

部屋の中を、ゆずるの姿を探して見回した。すると、ゆずるはベッドの上で身を縮ませて座っていた。

「ゆずる？」

声をかけるが、返事はない。近寄つてみると、ゆずるはガタガタと何かに怯えるように震えている。

信じられなかつた。ゆずるが恐怖に身を震わせているなんて。つい先ほど数久に言われた言葉が脳裏に浮かび上がつた。
守らねば！ 守つてやりたい。

こんな感情をゆずるに対して抱いたのは、コレが初めてだつた。
「な、直久」

ゆずるが直久に身を寄せてきた。

「誰かが見ている」

押し殺したような声を直久の耳元で出す。

「目がたくさん……ある」

どうやら、ゆずるには、この暗闇のいくつもの皿玉が見えるらしい。

「俺を捜してる。今のところ、結界を張つていてるから、奴らには俺の姿が見えないけど、それも直に消える。俺の力がどんどん失われていくのが分かるんだ」

ゆずるは頭を抱え込んで、ますます身を縮めて震わせた。その様子を見ていて、居たまくなつた直久は、考えるより自然に体が動いていた。ゆずるを隠すよつに、その身に覆い被さつた。

「大丈夫だ。結界が消えても、俺がお前を奴らから隠してやる」

普段は、直久に触れられることをひどく嫌うゆずるだったが、この時ばかりは何の抵抗も示さなかつた。

「いつも『こう素直なら、結構可愛いのにさ。』

さすが、いとこ。数や俺と似た顔立ちだし。髪なんかもサラサラ

だ。躰の線も細いよなあ。

数も細いけど、なんか、もつと……。

「消える」

「え？」

突然のゆずるの言葉に聞き返した時だ。

「ツ。

糸が切れたような音だった。やつと聞き取れるような音で、それが結界が消えた音だと分かるまでに数秒の時間が必要だった。その途端、ひどい目眩がして、空気が重くなつた。

何かいる。そうハツキリと直久は感じ取つた。

何人もの人の気配。

いる！

ゆずるをしっかりと抱き寄せる直久は辺りをゆっくりと見回した。

「ゆずる、何か見えるか？ 何かいるか？ ゆずる？」

「わつ、わからない。見えない。何も、見えない」

ゆずるは本当に力を失っているらしく、完全に普通の人となつてしまつたのだと知る。

守らなければ、俺が！

そう決意した時、ゆずるの躰が直久の腕から、ずるりと抜けた。何者がゆずるを引っ張つていいとするのだ。直久はあわてて引き戻した。

「ゆずる、しつかりしろ！ 僕に掴まれ！」

ゆずるの腕を自分の首に回させて、抱き寄せる。

「痛つ」

ゆずるが小さく呻いた。

「足を。足首を……」

細い声に、直久はゆずるの足首を見た。すると、その足にいくつもの手が絡み付いていた。

その手は青白く、暗闇にはっきりと浮き上がり浮き上がる。そう、

見えるのだ。直久にも見えるのだ。

初めて見たものに放心しかけた直久だつたが、再びゆずるの身体がその手に引っ張られて、我に返つた。

今はまず、ゆずるだ。そう思い、腕に力を込める。腕の中で、ゆするが躰を震わせている。直久は背後に人の気配を感じた。だが、振り向くことはできなかつた。ゆずるを引き寄せるだけで精一杯だ。

ズルッ。

再び、いくつもの手が一斉に力込めてゆずるの足を引っ張つた。直久も引き戻すために、力を入れようとした。さつきの背後の気配がより強くなっているのに気付く。すぐ後ろにいる。

直久の肩に長い黒髪がかかつた。ずしつ、と体が重くなる。息苦しい。くつそう。なんて奴らだ。

さらに強い力がゆずるを引っ張る。直久の手は、もはやしづれて感覚がない。

今にも離してしまいそうだ。意識も危うく、次第に薄れてくれる。

「かつ、」

最後の力を使い果たすとばかりに、その名を叫んだ。

「数！」

すると、けたたましい音を立てて扉が開き、数久が駆け込んできた。

「ゆずる！ 直ちゃん！」

数久はすぐさま印を結んで式神を呼ぶ。蒼いオーラが数久から放出され、それは大蛇を形取つた。

初めて目にした数久の式神は、話で聞いたよりもよほど綺麗だと、直久は思つた。

靈たちの気配が消えると、直久は脱力して、抱き寄せていたゆするの肩に額をもたれさせた。

「だああああああーっ。疲れたぞ、俺は！」

「『ぐるうさま』

「もつと早く来いよな」

直久の文句に、微笑みながら数久はスタンンドの電気を付けた。ゆするの無事を確認する。

直久の腕の中で氣を失っていたが、どうやら無事のようだ。直久も数久もホツとして顔を見合せた。

だが、すぐにその両足を見て青ざめる。

足首から脹ら脛にかけて、いくつもの手跡が赤紫色になって、ハッキリと残っていたのだ。

4・はあ？ セリヤア、うせだわ！」

朝っぱらから、ゆずるの機嫌は最悪だつた。

昨夜、そのまま、ゆづるを抱き締めた格好で眠つてしまつた直久は、ゆづるに蹴り飛ばされて目が覚めた。

「いつてなあ～」

ベッドから転がり落ちた直久は、強かに打ち付けた腰をさすりながら、ゆづるを睨みつけた。

「いきなり何すんだよつ、てめえーは！ 昨日の夜、散々世話かけやがつたくせによ！」

「お前が勝手に世話やいたんだろう！ お節介野郎！ こっちは一言も頼んでない！」

「んだと！」

ぶち切れ、掴みかかろうとした直久の顔面めがけて、ゆづるは手元にあつた枕を投げつけ、阻んだ。が、顔面に受けたところで、所詮、枕だ。それも、頑丈だけが取り柄の直久には、痛くも痒くもない抵抗で、直久はいとも容易くゆづるを組み敷いた。

もし、今日が満月でなければ、ゆづるも、もう少し抵抗らしい抵抗をしただろうが、それもできず、屈辱そうに眉を歪ませた。直久はそんなゆづるの表情を満足そうに見下ろすと、

「いい眺め

と、耳元で低く呟きやこした。ゆづるの顔が見る見るひびに真っ赤になつていいく。

「……で、出てけ！ 今、すぐ、出てけ！」

ゆづるは、渾身の力を込めた蹴り技を直久の急所にくり出す。

そして、再びベッドの下に転がったその身体を、間を入れずに部屋の外に蹴り飛ばした。

まあ。そんな些細なエピソードのせいなのか、ゆづるの機嫌

は最悪を極めていた。

朝食後、俺らが向かつたところは、昨日、数が怪しいと指摘した三カ所のうちの一ツで、そこはなんと、生け贋が捧げられた山だと言つ。

で、俺らはオーナーの案内で朝っぱらから山登つよ。いや、べつにね。俺は口頃鍛えてんじゃん。

だから、山登り、全然OKなわけ。朝っぱらだらうが、雪道だろうが、いいぜ、べつにい。

じゃあ、何が気にいらねえのか、って言つと。あれよ。ゆずる。なんつか、不機嫌な奴が側について、そいつが、ぶうへたれてるとさ、こっちまでムカついてくるんだよなあ。しかも、ゆづる、歩き方がめっちゃ危なつかしいし……。

ほら、また躓いた。

思わず支えようとして出した腕を、直久はあわてて引き戻した。その手を、まじまじと見つめる。

何やつてんだか。

顔はかわいい。認めよう。だけど、性格は最低だ。素直じゃないし、足癖悪いし、高飛車だし……。

ゆづるに対する文句をブツブツ言つている横で、数久が不意に声を発した。

「ゆづる辛そうだね」

先を歩くオーナーやゆづるには聞こえないくらいの小声だった。

「だったら、おいて行きやあ良かつたんじゃねえ？」

「それはダメ。あの家においていくなんてできないよ。だって、ゆづるは今、力が使えないんだよ。そんな時、もし、何かに襲われたら

「

「ひどたまりもねえな」

数の話では、普段巨大な力を収めているゆづるの体は、その力を失い空っぽの状態になつた時、靈だの妖怪だの魔だのに、狙われやすいのだという。

つまり、昨晩のアレもそういうことだつたのだろう。

靈とかが人間の体を欲して憑いたり、乗つ取つたりするのはよくあることだが、それをやられた人間は長いこと生きていられない。まず、精神面で滅び、すぐに死んでしまうから。

そうすると、靈たちはまた新たな器を求めなければならないのだが、その点、ゆずるの体は、いわゆる超高级品で、そういう得体が知らないモノを入れるには持つてこいつて品物なのだといふ。

普段から得体のしれない力を收めているだけあって、得体の知れないモノが入り込んでも、まったくOK。

ダメージ〇、ってカンジなんだそうだ。靈たちが狙うのも分かる。

「それしても……」

直久は昨晩の出来事を鮮明に思い出しあつとした。

「女の手だつたな」

「え？」

「ゆずるの足引っ張った奴ヤ。女の子の手してた。あと、俺の背後にいた女。超長いストレートの黒髪で、すっげえ怖い感じがした。俺の肩に髪の毛垂らしやがつたんだぜ」

そう言つと、直久は今更ながら、その髪の毛を振り払う仕草をした。

「さつき気が付いたんだけどね、ゆずるの部屋、開かずの扉の部屋の真上だつたんだよね」

「ああ、あのミステリアスの……」

「実はね。三力所怪しいところがあるつて言つたでしょ？ その一つが、その開かずの扉の部屋なんだよ」

「それを早く言えよ！」

「「めーん」

「ちなみに、残り一つはどこだつて？」

「舜さんの部屋」

舜さんは、紫緒さんや妃緒ちゃんのお兄さんだ。だが、未だにそ

の姿を俺たちに見させてくれない。

怪しい。確かに、怪しい。

「と・こ・ろ・でつあー」

「ん? 何?」

直久にしては珍しく、何か言い難そうにしている。

「どうしたの?」

「ちょっと聞きたいんだけど、俺らって何?」「え?」

突然、何? と聞かれても、困るのは数久の方だ。数久は直久の心中を探るように、直久をじっと見つめた。

「もしかして、うちのこと聞きたいの? どうして、うちの家系の人は妙な力を持っているのか……とか?」

直久は言葉なく頷いた。

「やつと聞く気になつた?」

「だつてさあ。見ちやつたんだぜ、俺。靈なんて存在しないなんて主張していた訳じやないけどさあ。本当言うと、半信半疑だつたつて言つうか。数たちの力だつて実はトリックかなんかじやないかつて、心のどこかで思つていてさー。実際、何度も目のあたりにしてきたはずなんだけど、霧がかかつてたみたいに、ちゃんと見てなかつたんだと思う。だから、『冗談みたく思つてた。』 だけど、昨夜のことで、ああ、これ、マジなんだつて」

「靈も、僕たちの力もちゃんと認識したら、どうしてこんな力を持つているのだろう? って疑問に思つたんだね。いいよ、教えてあげる。本当は、お祖父様か、お母さんに聞いた方が確かなんだけど、今知りたいでしょ?」

再び素直に頷いた直久を見て、数久は何やら嬉しそうに微笑んだ。

「でも、どこから話せばいいのかなあ? 直ちゃん、陰陽師つて知つてる? 安倍晴明とか聞いたことない?」

「ない」

「じゃあ、そこからだね」

雪道を話しながら歩いているために、数久の息は上がっている。

何もこんなところで聞かなくてよかつたなあ。

そうは思つが、すでに話す気満々である数久に、やっぱイイだなんて言えない。

直久は、雪に足を取られ、よろけた数久の腕を支え、話を促した。
「陰陽師というのは、平安時代に活躍した、いわば占い師みたいな人たちのことで、安倍晴明は、その陰陽師の中で最も力が強いと言われた人なんだ」

「へー」

いきなり平安時代まで話が飛んでいつてしまい、直久は気の抜けた声で返事をした。

陰陽師だと、安倍晴明だと、いったい何の関係があるんだ？

「数年前、占いブームになつた時、安倍晴明が注目されたから、彼についてはそこそこ知つている人が多いけど、陰陽師＝安倍晴明みたいに思い込んじやつている人がほとんどなんだ。だけど、陰陽師つていうのは、仕事の一種なわけでしょ。だから、彼の他に何人もの陰陽師がいたわけ。それが、彼一人の影に収まってしまうほど、彼は強い力の持ち主だつたんだ」

数久はいつたん言葉を句切つた。足下の雪に目を落とす。

「彼の影で、歴史の波に呑まれ、消え去つていつた陰陽師たちの中に、大伴泰成という人物がいたんだ」

「おおどものやすなり……。聞いたことがある気がする」

「そりや、僕たちの御先祖様だもん」

「マジで？ あべのなんとかあ～と言つ奴に力負けして、忘れ去られちゃつた奴が？」

「そうだよ。だけど、僕たちの御先祖は他の陰陽師たちみたいに、晴明の影で黙つているような人じやなかつたんだ。彼は晴明と同等、ううん、それ以上の力を手に入れようとして、様々な鬼たちと契約

したんだ」

「契約？ 鬼と？」

「自分の死後、自分の体を捧げるから、自分の式神になれ、ってね」

「体を捧げるつて？」

「鬼とか、妖怪たちの中にも、性格の違いがあるんだけど、大抵、捧げられたら、食べるよ」

「食べる……？」

「これは余談だけど、彼が亡くなつた瞬間、その死体が、髪の毛一本残さず消えちゃつたんだつて。つまり、彼に使役されていた鬼たちが契約通りに持つていつたからなんだ。ある鬼は右腕、ある鬼は左足みたいに、彼の死体からもぎ取つて」

「うげっ」

「話は戻るけど、より強い式神を手に入れるために、より強い鬼を探していた彼は、ある時、一匹の雌妖狼と出会つたんだ。その妖狼は真っ白い毛並みの、本当にきれいな狼だつたんだつて。そして、まあ、いろいろあつてね。彼はその狼との間に女の子を儲けたんだ」

「儲けたつて。狼だろ？」

「人間と獣の結婚つて、よくある話だよ。中でも狐の例が一番多いね。人間に化けた狐と、そうとも知らない人間の獣婚の話、昔話とかになつて語られてるでしょ」

「マジでえ？」

「とにかく、その生まれてきた女の子の名前は小夜といつて、彼女が生まれた時にはすでに晴明は他界していたわけだから確かにじやないけど、おそらく小夜の方が強い力を持つていたと言われているんだ。もつとも、そんなことを言つているのは、うちの家だけだから、ますます分からぬけど」

と言つて、数久は肩を竦めた。

「幼い頃、小夜は泰成ではなく、母狼に九匹の兄姉たちと共に育てられたそうだよ。そして、成人後、泰成に都に呼ばれたんだ。そこ

で、巫女として活躍した彼女は、九匹の妖狼を式神に持つていたことから、九狼の巫女と呼ばれるようになつたそうだよ。九狼 その『ぐるり』という音がいつの間にか『ぐどり』になつて、『九堂』になり、それが本家の姓となつたわけ

直久は頭を抱えた。

「ちょっと待て。消化不良って感じ」

「うん、一気に言い過ぎちゃつたかも。話も飛び飛びになっちゃつたし。ゴメンネ。話し下手で。 要するに、僕たちの人間離れた力は、その雌狼と泰成が交じつたことが直接の原因なんだ。でも、孫、そのまた孫つて、代を重ねていくと妖狼の血も薄くなつていくわけでしょ。力を失うこと畏れた僕らの祖先は、薄くなる度に妖怪と交じつたらしい。身近なところで言つて、お祖母様のお父様がイタチの妖怪だつたとか……」

「はあ？ そりやあ、うそだろ？」

「でも、曾お祖母様は未婚でお祖母様を生んでいらっしゃるよ。うちのよくなお堅い御家で、未婚の母つて普通じゃないと思わない？ しかも、その娘が当主に嫁したりなんて、普通じゃあ考えられないでしょ」

「そうかも……」

なあんて、納得して見せたが、やっぱり頭の消化不良はひどくなる一方だった。

しばらく歩くと、鳥居が見えてきた。オーナーはそこで足を止めた。

鳥居の手前に古い柵があり、それは山をぐるりと取り囲むようずっと続いている。

柵には何枚も御札が貼つてある。ゆずるがそれらを見やり、言つ

た。

「これは封印符ですね。なるほど、神を崇めるといつよりも、ここに閉じ込めているというわけですか」

オーナーに振り向くと、彼はゆずるに大きく頷いた。

「生け贅は、ここまで村人に付き添われてやつてきます。そして、ここから先は一人で山を登つていったそうです。つまり、ここから先は生け贅になる少女しか入ってはならないとされ、私がご案内できるのもここまでです」

「十分ですよ」

ゆずるが急そうに答えた時、辺りを散策していた数久が小さく声を上げた。

「どうした？ 数」

皆は数久が指す場所に目をやる。そこには、薙ぎ倒された柵の残骸があった。

「最低」

人が余裕で通れるほどの穴があいてしまった柵を目にして、ゆずるはその場にしゃがみ込んだ。

「結界が張られている気配がしなかつたから、おかしいなと思つて。やつぱり、破られていたね」

苦笑しながら、数久は、どうする？ とゆずるを振り返った。

「誰が結界を破つたのかというのは、後で考えるとして、せつかく破られているのだから行つてみよう」

そう言って腰を上げたゆずるを、オーナーはギョッとして制した。数久はふんわりと微笑む。

「大丈夫ですよ。ここのはすでに出ていってしまったようですし。オーナーは先に戻つていてください。ここから先は僕たちだけで行きますから」

オーナーは止めても無駄だと知ると、気を付けてくださいと言いい残し、来た道を下つていった。

それを見送つてから、三人は柵を跨いだ。

鳥居をくぐつた先は、雪が特に深く積もっていた。歩きづらい。腰の高さまで埋まるのだ。

「数、何とかしろ」

いい加減限界なのか、ゆずるは雪の中にうずくまつた。顔色がひどく悪い。

普段、これほど歩くようなこともない上に、メール先のペンを取ることにさえ力を使はねずるだ。

この山道は、かなりしんどいに決まっている。

数久は進行方向に向かって、空中に何やら文字を描いた。目を閉じてブツブツ何かを言つたと思ったら、かつと見開いて両手を広げる。

すると、「おーと言つ低い音と共に炎が渦となつて現れた。

一瞬にして辺りの雪を溶かしてしまつた。

「……ごめん、もつと早くに、こうすれば良かつたんだけど。オーナーを驚かせたらいけないと思つて」

ニッコリして振り返つた数久を、当たり前だと言つよつて頷くやつ。対し、直久は腰を抜かしていた。

テレビゲームの魔法みてえ）。つーか、マジ！ 人間？ とりあえず、地球人？

数久のおかけで、断然、歩きやすくなつた道を突き進んでいく。しばらくして、社のよつなものが見えてきた。辺りには、寒椿の木が赤く綺麗な花を咲かせている。

「椿か……」

椿は普通その名の通りに、春に咲く花を付けるが、他の草木が枯れる真冬に鮮やかに咲くものもあって、それを寒椿と言つ。

「椿は、彼岸花に匹敵する不吉な花だったな」

ぼそりと呟くが零す。

「不吉?」

思わず聞き返した直久の問いに、朝のこと引きずつているゆず
るは答えなかつた。

いや、ゆづるの場合、単に面倒臭いだけなのかもしれない。代わ
りに数久が説明してくれる。

「彼岸花は知つてゐるよね?」

「昔、墓地とかによく咲いていたヤツだろ? 日本映画で、墓場を
イメージしたシーンに使われるヤツ。毒とか、あるんだつけ?
だいたい名前からして怪しいじやん。彼岸花の『ひ』の字つて、
彼方の『か』の字と同じだろ? 『彼』つて漢字には『向こう』『
遠く』つて意味があるから、彼岸花は『向こうの花』つてわけだ。
向こう岸つていうのは、やっぱ、死後の世界のことだらうじ。三途
の川を越した向こう岸。

ぱつと見、きれいだけど、何か不気味だよな

「そうだね。じゃあ、椿は?」

「椿は不気味つて感じじやあないだろ? 確か花言葉も、赤い花の
方は『美しい』だし、白い花の方は『可愛い』だ」

「……花言葉なんて、よく知つてるね」

「物知り博士、直ちゃんと呼んでくれ!」

「……でね、直ちゃんが映画の例を出してくれたから、それに合わ
せるけど、人が死ぬ瞬間を表現するのに使われやすい植物、それが
椿の花なんだ。椿の花つて、咲きると花の部分がそのままの形で
落ちるでしょ。ポトリつて。その様子がまるで、首が落ちるみたい
だつて言つんだよ」

「誰が一つ!」

「知らないよ。昔から言うの。 で、その椿の花が落ちるシーン
があつたら、死んだんだなあ、と思つわけね」

「首かよ」

「しかも、血で赤く染まつた首」

「ひいひい。想像したら怖くなってきた。だつてよ、落ちてる花一つ一つが首だと想像して……」

「ええええええ、と叫び声をあげた直久に数久は苦笑した。

「やめなよね、そういうこと想像するの」

「どうせするんなら、美人のお姉ちゃんの裸体にしふ、つてか？」

「そんなこと、言わないよ」

それから、ぐるりと社の回りを歩いたが、これと言つて氣になるモノを発見できず、三人はペンションに戻ることにした。

「やっぱり、仮にも神様だつたからかなあ。透視できなかつたのつて」

「そりかもな。生け贋を捧げられていた程だ。よほど力を持ったヤツなんだろうな」

力を失つてゐるゆづるには分からぬことだが、数久は誰もいないはずの場所から絶えず何者かの気配を感じていた。それはおそらく、社の主である『神』の残像に違いない。

「そんなヤツを相手にするとなると、やつかいなことになる」

直久を不安させるようなセリフを、ゆづるが吐いたところでペンションに到着。

早つ！　と言つのは、はいつ、と差し出された数久の手を直久がおずおずと握ると、数久は直久とゆづるの手を強く握り、そのまま瞬間移動したからだ。

あつという間にペンションだよ。ありかよ、こうこうのー行きの苦労は何だつたんだ！

……だけど、この瞬間移動は一度行つた場所にしか行けないらしい。しかも、すっげえ疲れるとか。

へた」と座り込んだ数久を、ゆづるは肩をすくめて見下ろした。
「無理すんな、ばか。数がへばつている間に何かが襲つていたら、どうすんだよ？」

「でも。ゆづる、辛そうだつたから……」

「馬鹿つ！」

一度田の『ばか』とは異なり、一度田のそれは、本気の怒鳴り声だった。くるりと背を向けたゆずるは、明らかに怒っている様子だった。ゆずるはプライドが高く、人に気を遣われることを最も嫌つていた。

「ごめん」

即行で謝った数久だが、それは更にひどくゆずるの気に障つたらしい。ゆずるは、無言でペンションの中に入つて行つてしまつた。

苦笑いで、数久は直久に振り向いた。

「怒らせちゃつた」

「いいんじゃねえの？ 放つとけば」

「そういうわけにもいか……」

突然、言葉を切つた数久に直久は怪訝な顔を向ける。

「どうかしたか？」

数久はペンションの三階の奥の方の部屋の窓をじつと見据えている。

「今、あそこから、誰かがこっち見てた」

「え？」

「あの部屋つて、確かに、舜さんの部屋だよね？」

「そうだな」

直久もその窓を見上げた。厚いカーテンが引かれている。

「俺さ、疑問なんだけど。なんで、舜さんだけ三階なのかなあ、つて。オーナー一家つてみんな一階に部屋持つてんじやん。それに舜さんつて足が不自由なんだろ？ だったら、余計一階の方が便利じやねえ？ 食堂だつて、風呂場だつて、一階にあるわけだしさ」

「そうだよね」

「それに、オーナーも奥さんも、一度も舜さんの話してないじゃん

「うん、そうだね。ちゃんと調べてみる必要があるみたい」

二人はもう一度、その窓を見上げた。

5・数う。早く助けてくれよ〜

「あのひ。ゆずるさんは？」

言い難そうに、オーナーの奥さんが数久と直久の間に目を漂わせながら、尋ねた。

あれからずっと部屋に籠もつたままで、畳食の席にも、ゆずるは姿を現さなかつた。

「気分が悪いそうなので……。すみません」

本当に申し訳なさそうに謝つた数久の横で、

「気分じゃなくて、機嫌だろ」

と、直久は口一杯にご飯を詰め込んだ。

数は悪くない。ゆずるが勝手に怒つているのだ。数はゆずるを心配しただけなのに。

ホント、わけ分かんないヤツ！

怒りに任せてガツガツ食べたために、味がまるで感じられない。奥さんの手料理だというのに、なんつーもつたいないことをしたんだ！俺は！

ある程度腹が満足して、落ち着いた直久は奥さんに対して申し訳ないやら、ひらすら料理がもつたいいやら、沈んだ気持ちになつた。

だが、落ち込んでばかりもいられなかつた。急に、ゆずることが氣なつたのだ。

ゆずるは今、力を失つてゐる。そんな時は悪霊に狙われやすいと言つのに、よりによつて、ゆずるはあの超怪しげな開かずの扉の部屋の真上に、たつた一人でいるのだ。

「大丈夫なのかよ？」

「え？」

「ゆずる、一人で」

直久の口から、まさかやずるを心配するような言葉が出てくるとは思いもしなかったのだろう。

数久は一瞬面食らう。だが、すぐにやんわりと微笑んだ。

「大丈夫だよ。雲居に側にいてもらっているから」

「雲居というのは、数久の白蛇の式神の名前だ。

「ならいいけど」

直久は視線を落として湯飲みに手を伸ばした。すっかり冷めた緑茶を一息に飲み干す。

ほつ、とさせる穏やかな時間が流れた。

オーナーは湯飲みを片手に新聞紙を広げている。奥さんは台所で片付けをしている。食器がぶつかる音が、静かに響いていた。

いつの間にか、妃緒の姿がなくなっていた。そうと気付いた時、今がある事を聞くチャンスだと直久は思った。あの事、つまり、舜さんのことだ。

隣を振り向くと、数久も同じように考えたようで、目が合つて深く頷いた。

「オーナー、ちょっと良いですか？　お聞きしたいことがあります」「何かな？」

オーナーは新聞紙をテーブルの上に四つ折りにしておくと、二人の方に顔を向けた。

「ええーと、あの……」

切り出したものの、どう尋ねたらいいものか数久は迷っているようだ。おそらく差し障りのない言葉を選んでいるのだろう。

オーナーが舜のことを話さなかつたのには、それなりの理由があつたからなのかも知れない。……だとしたら、聞いていいものだろうか？

いや、むしろ問題は、本当に舜という人物が存在するのだろうかという疑問だ。

妃緒以外の者から舜の存在は聞かされていない。その上、舜が存在しているという気配がまったくないのだ。もしや、舜は妃緒が勝

手に作り上げた想像上の人物ではないだろうか。

あらゆる思考が交差する。言葉に詰まつた数久に代わつて、口を開いたのは直久だった。

「舜という名前に、心当たりないですか？」

「舜……？」

途端、オーナーは顔色を失つた。エプロンで濡れた手を拭きつつ、台所から戻ってきた奥さんもひどく青い顔をしている。とにかく聞き覚えのある名前らしいことに、間違はないようだ。

すると、舜は本当に存在する人物だったのだろう。数久は胸を撫で下ろし、直久の言葉を継ぐ。

「妃緒さんに、お兄さんだとお聞きしました。」

「妃緒に？」

双子がそろつて頷くと、観念したかのようにオーナーは、ぽつりぽつりと話しだした。

「　　はい、舜は紫緒と妃緒の兄です。とても、妹想いの優しい子でした」

過去形で言い切られた言葉に、直久も数久も嫌な予感がする。「紫緒があのようになんてしまつて、すぐのことでした。舜は紫緒を助けてやろうと、山に登つたのです」「山に？」

直久は聞き返した。

「今朝登つた山ですね？　生け贋が捧げられたといつ」

聞き返すと言つより、念を押すように数久が言つと、オーナーは深々と頷いた。

「おそらく、山の神に頼みに行つたのでしよう。ですが、その日は登山を妨げるような激しい吹雪で、皆が止めるのも聞かず出かけた舜は、そのまま戻つてしまませんでした。翌朝、吹雪が止み、捜索隊が山に入り、舜の亡骸を見つけてくれました」

「亡骸……」

死体つてことだよなあ。死体つてことは死んでいるつてこ

とだから……。

直久は、間抜け過ぎる言葉の変換を頭の中でする。

死んでいるってことは、生きてないってことで、あの3階の

部屋にいるって一のは……？

うそ？

「あのう、舜さんは生前、3階の奥の部屋を使つていましたか？」

「3階？」

数久の問にオーナーは怪訝な顔をする。

「3階は全て客室になつていますが。ほとんど……ところより、全く使用しておりません。妻が時々掃除をするくらいで、普段は上がることもないですよ。ないものだと思つてゐるくらいです。それに、舜の部屋は1階にあります」

双子は顔を見合せた。妃緒が何らかの理由で偽りを言つたことは明らかだった。

「じゃあさー、足は？」

「足？」

「生まれつきの奇病で歩けないと聞きました」

「奇病？　妃緒がそんなことを言つたのですか？」

今度はオーナーと奥さんが顔を見合せる番だ。

「そのようなことはありません。一人で山に登るくらいですからきつぱり言い切つたオーナーの言葉に、なるほどと直久は思う。吹雪の中、車椅子で山登りは無理だ。いや、吹雪じゃなくとも無理っぽい。じゃあ、なんで妃緒は奇病だなんて言つたのだろう？　そして、なぜ、あの部屋に舜がいるだなんて言つたのだろう？　あの部屋に何があるというんだ？」

オーナーは少し考えて、再び口を開いた。

「そういえば、舜の亡骸は損傷がひどかつたのです。首の骨が折れ、肋骨も数本折れ、内臓に突き刺さつっていました。腕はあり得ない方向に曲がり、特に足はひどく、両足が膝より少し上で千切れてしましました。千切れた足の骨は、粉々に……。おそらく、足を滑らせ、上

「方から転がり落ちたのだと思います」

淡々と語るオーナーに対し、奥さんは堪らず、口元を押されてその場からそっと離れた。

台所からすすり泣く声が静かに響いてきた。

「さらにひどい話に、舜の亡骸は消えてしまったのです」

「消えた?」

「少し目を離した隙に」

そう言って、オーナーは口を開いた。これ以上何も聞き出すことが出来ないと二人は判断して、席を立つた。

「……すみません」

淡々と話して見せたオーナーだつて、この話は辛いはず。数久が謝罪すると、彼はゆっくりと首を横に振った。

食堂を出た双子は、どちらかが提案したわけではなく、自然とそこに足を向けた。一段一段、足を進めて行くにつれ、気が重くなつた。

妃緒の意図が見えない。

なぜ嘘などついたのだろう?

最後の階段を上がり、3階にたどり着いた。少女たちの肖像画が飾られている廊下が長く続く。

「あの部屋だよ」

低めの声で数久がささやいた。言われるまでもなく、廊下の先にあるその部屋は不気味に存在していた。

ドライアイスに似た靈気が、その扉から漏れ出ているのが見えた。ふと思つことがあつて、足を進めようとした数久を直久が止める。

「何?」

「話したと思うけどさ。昨日の夜、俺、見たんだ」

「何を？」

要領を得ない直久の言葉に、数久は眉を歪ませた。

「女だよ。髪の長い。あと、手とか」

「ゆずるを襲つた靈？　ああ、言つてたね」

「あとさあ、気配とか感じんの」

「気配？」

「今だつて、あれ、見えるし」と、靈氣を顎で指す。

「見えるの？」

「灰色っぽい」

「本当に見えているんだね。どうしたの？」

「俺に聞くなよ。俺が聞きたい」

「……だよね」

今まで、まるつきりの常人だった直久が、いきなりどうしたんだろ？　数久は首を傾げる。

「とりあえず、そのことは後でゆづくつ考えよ。お祖父様に聞いた方がいいかも」

「じじいに？」

俺らの間で『お祖父様』なんて、『大層に呼ばれる人物はただ一人、母方の祖父のことだ。

ゆづるとの共通の祖父であり、つまりは、我が家の当主だ。

「何でそこで嫌そうな顔するかなあ？　お祖父様に一番可愛がられているのって、直ちゃんでしょ」

「ばばあには、嫌われてるけどな」

「そんなこと……」

ないとは言い切れない微妙な事実あつた。祖母は、なぜか直久を自分から遠ざけようとする。恐ろしいものを見るよつな田で。

「とにかく、その話は後にしようね」

そう答えたものの、腑に落ちなかつた。双子は、柔らかい絨毯が敷かれた廊下を進んだ。

埃臭さとカビ臭さが戦っているようなひどい臭いがする。壁に手をやると、ザラリとした感触ある。

時々掃除をすると言つていたが、本当に時々なのだろう。ふいに、例の扉を目の前にして、直久は足を止めた。気配でそれに気付き、数久が振り返った。

「どうしたの？」

「動けねえ！」

「え？」

直久は顔を引きつらせ、硬直している。

「何、遊んでるの？ こんな時に」

「遊んでない、遊んでない。マジ動けないって。蜘蛛の巣に引っかかった蝶々って感じ。もしくは、ゴキブリほいほいに捕まつたゴキブリ」

「たぶん、直ちゃんなら後者だね。ちょっと待つてて」

数久はすうーと目を細め、直久の回りを見る。

「結界がある」

「結界？」

「それも捕獲用の……」

「なんだそれ？」

「簡単に言つと、罠みたいなもの。悪霊とか妖怪専用の罠だから普通、人間は掛からないはずなんだけど」

「なんで俺、掛かつてんだよ！」

「さあ～」

直久は当然ながら、数久にだつて、わけが分からぬ。

「数う～。早く助けてくれよ～」

情けない声を出す直久に申し訳なさそうに数久は頭を振った。

「結界を張つた本人にしか解けないんだよ。あとは掛けた者が結界を張つた者の力を上まる力で破るか、第三者が圧倒的な力で破るか……。さつき直ちゃんが蜘蛛の巣に掛けたゴキブリみたいつて言つたけど」

「ゴキブリじゃなくつて、蝶」

「それにして、ゴキブリつて蜘蛛の巣に掛かるんだろうか？」

「……って、聞いてねえーな、おい」

「それについての議論は置いといて、つまりね、第三者が結界を破るには、例えば、人間が蜘蛛の巣を破るくらいの力の差が必要なんだ。蜘蛛と人間くらいの差だよ。絶好調のゆづるなら何とかなるかも知れないけど、今、絶不調だし、僕には無理。この結界を張った人かなりの力の持ち主だと思うよ」

「じゃあ、どうすんだよ！」

直久は大声を張り上げた。

その時、ギィイイイイイ、と耳の痛い音を響かせて、数久の背後で扉がわずかに開いた。数久は弾かれたように振り返って、身構えた。直久も目を見張る。

開いた扉から、キイキイという車輪の音がする。次第にその音は近づいてくる。

「妃緒ちゃん？」

恐る恐る呼びかけるが、返事はない。扉のすぐ側まで音がたどり着いた。そして、今度は大きく開いた。
ギィイイイイイイイイイイイイ―――。

「！」

ぶわっ、と冷たい靈気が一人を襲う。鳥肌が立つた。だが、不思議と恐怖はない。

こんなにもものすごい靈気を放つ相手を前にして怖いとか、恐ろしいとかいう感じがないのだ。

直久も数久も開け放たれた扉の先にいる人影を見据えた。姿を現せた人物は車椅子姿の青年だった。

紫緒さんに似た雰囲気を持つたその青年は、結界に掛かった直久を見上げて、ふつと笑つた。

「意外なモノが掛かつたな」

そう言うと、すっと手を挙げた。途端、直久の体は自由になり、

がくつとその場に膝をついた。それを見て、数久はその人物を睨む。

「あなたがあの結界を張つたんですか？」

言葉遣いは丁寧だが、めずらしく怒っているようだ。

「あなたは何者ですか？」

問いつめる数久とその人物の間に少女が入り込んできた。妃緒だった。妃緒はその人物を守るように両手を広げ、数久を睨んだ。

「私のお兄ちゃんよ」

その妃緒の言葉に耳を疑う。

「お兄ちゃん？」

「お兄さんって、舜さん？」

直久と数久は信じられないものを見るかのように、妃緒の肩越しにその人物とを見つめた。

美形と言うのに相応しい纖細な造りの顔立ち。瘦せすぎではないが、線の細い体つき。色白い肌。紫緒さんの時もそう思つたが、生きている人間っぽくない。人形みたいだ。

この人が舜さん？

車椅子に座つた彼の体には、やはり足がなかつた。膝上から干切れている。

「舜さんは亡くなつたつて……」

「お兄ちゃんは死んでない！　ここに、こうしているじゃない！」

確かに彼は動き、言葉を話した。だが、オーナーは言つたのだ。舜は死んだのだと。

数久はその人物をじっと見据え、もう一度くり返し問つた。

「あなたは何者ですか？」

すると、彼は妃緒の腕を引き、その身体を自分の方に寄せると、彼女にふわっと微笑んだ。

「妃緒、彼らと話がしたいんだ。部屋の中に入つて待つていってくれ」

妃緒が渋々といった感じに部屋に戻つて行くのを見て、直久が唸る。

「てめえーの正体は妃緒ちゃんには内緒つてわけか？」

「彼女はこの体の本当の持ち主のことを慕つていてね。吾をそいつだと信じて、まとわりついてくる。それが何とも言えず可愛くてな」「ばれたくないってわけか。で？ なんなんだ、てめーはよ」
彼は、ふつと不敵に笑った。

「ここの人間は吾を山の神とか呼ぶ」

「山の……」

「……神？」

思ひがけない答えに一瞬あつけにとられた直久と数久だったが、すぐに我に返つて、更に問いかけた。

「結界なんて張つてどうするつもりだ？」

「この家で悪さしている靈を捕まえようと思つたんだよ」

「靈を？」

「長い黒髪の少女だ」

「なぜですか？ あなたには関係がない」

「関係なくはない。贊を捧げられた以上それに答えないとならんからな」

「贊？」

「この体の命だ」

舜さんは山で絶命した。そのことによつて、本人の意思とは関係なく、生け贊になつてしまつたのだ。

過去、生け贊となつた少女は村の繁栄を願つて死んだ。そして、この神はそれを応えた。

舜は紫緒の案じて死んだ。だから、この神は紫緒のためにこの家に取り憑く惡靈を捕らえようとしているのだ。

「なるほど。よおく分かつた。だがな、俺がその結界に引っ掛けたつていうのはどういうことだ？」

直久の剣幕に彼はすうーと目を細めた。そして、

「君は体内に何か飼つているな」と言つ。

「は？」

「どういう事ですか？」

神と聞いて警戒を解いた数久の言葉遣いは柔らかくなっている。
「そちらの君も飼つているだろ？。君たちは式神と呼んでいたかな？」

？

「直ちゃん……兄にも式神が？」

確かに数久の式神、雲居は普段数久の中にはいる。

いると言つても正確に何処何処にいるとは言えないが、運命共同
体ごとく常に数久の側にいる。

もつとも、式神の所有の仕方はそれ一つではないが。

多く式神を所有する者などは全ての式神を体内に入れておけないので、石など物体の中に入れておいたり、必要としている時だけ呼び寄せるなど形を取る。

どれにしても、式神は一度対峙したことのあるモノではないと、己のものにはできない。数久だって雲居を式神にする時、いろいろと苦労したのだ。

気が付いた時には式神でしたという生易しいものではけしてない。それなのに、直久は己自身さえの気が付かないうちから式神を所有していると言うのだろうか。

だが、舜の頭は横に振られる。

「式神なのではない。人間に服従などしそうにもない邪悪なものだ」「なんだよ、それ？」

「分からぬ」

「そんなモノが体内にいて、兄は大丈夫なんでしょうか？」

不安げに尋ねた数久に彼は優しく笑いかけた。不思議と落ち着いた気分になる。

「今のところはな」

「今のところは？」

「どうやら封印を施されているようだ。だが、解けかかっている。
「くわづかだが、妖氣を感じる」

「妖氣？」

「そう。おそらくそのために吾の結界に掛かつたのだ」

愕然とする。

はい、そうですかと聞き流せるような話ではなかつた。
「その封印のために、君の本来の力が發揮できないでいるようだ」
追い打ちをかけるように言葉が付け加えられた時、やらりと目の前の空間が歪んだ。

『主殿』

すう一つと姿を現せたのは雲居だつた。平安時代の姫君を思わせる着物姿だ。

だが、本来鮮やかであるその着物姿は彼女の長く流れる銀髪のために、全体的に白いイメージが強い。

数久がいつも自慢するように確かに絶世の美女ではあるが、どこか冷たい感じがする美人である。

数久は雲居から知らせを受けて、見る見る青ざめる。

「ゆずるが危ない」

そう言い放つと、ぱっと姿を消した。瞬間移動したのだと気付くまで直久は時間を有した。

「君らはそんなこともできるのか。大したものだ。……だが、苦戦しているようだな」

直久は数久を追つて駆け出そとした。だが、舜がそれを止める。

「この方が早い」

彼はそう言うと、すっと片手を挙げた。

どさつ。突如、もつれ合つゆづると数久の身体が直久の目の前の空間に現れた。

直久も土肝を抜かれたが、現れた本人たちも状況判断が付かず、間抜けな顔をしている。

呆然としたまま転がつている一人に彼はうつすら笑つて、
「早く起きあがつた方がいい」

と、真つ直ぐ廊下に先を指差した。三人がそちらに向をやると、

その場所の床が盛り上がっている。

その盛り上がりは徐々に大きく膨らむ。嫌な予感がした。

ぬうーとその盛り上がりが顔を見せる。頭だつたのだ。

頭に続き、肩、腹、腰、足が現れた。黒髪は異常に長い。足首を越す。

昨夜ゆづるを襲つた悪靈だと直久は確信した。ゆづるを追つてここまで来たのだ。

少女の靈は完全に床を通り抜けると、その身体を数センチ浮かせて、滑るようにこちらに向かつて来た。

直久は指示を仰ごうと数久を振り返つた。が、数久は今朝のといい、さつきの瞬間移動で力を使い果たしてしまつたようで、青ざめた顔を返してくるだけだった。

一方、ゆづるはさらに悪い。まるで見えていないのだ。本能的に自分にとつて良くないものが近づいてくるとは分かるようだが、どうすることもできず、震えている。

最後の頬みだと舜を振り返る。すると彼は不敵に笑つた。まるで、直久がどう動くのか試しているよつこ。

少女の靈が近づいて来る。まっすぐゆづるに向かつて。

直久は何か考える前にゆづると靈の間に自らの身体を滑らせた。

ズズズズズズ……。

体内に異物が入り込む嫌な感じがあつた。

ゆづるの悲鳴に似た驚きの声が耳に響く。直久の体が傾きゆづるの腕の中に倒れた。

今にも泣きそうなゆづるの顔を目にした最後のものにして、直久は意識を手放した。

死ぬかもしれない。

闇に落ちていく感覚の中、漠然とそう思った。

6・いま何年？　何年何月何曜日？　ついでに句口？

例えるならば、泥の中に沈んでいく感じ。なんだか、生ぬるい。
38度の風呂つて感じ。

これが漫画なら、絶対、『ズブズブズブ』という効果音が書いてあつたはずだ。

なあんて、悠長なことを考えられるあたり、俺はまだ死んでいないらしい。

だけど、いつたい、どうなつちゃつたんだ？ 確か、靈が俺の体の中に入つてきて、……つて、まさか、俺、体乗つ取られたとかあ？ んで、今頃、カマ言葉で数やゆずると対話してたりして。

わ、笑えねえ。

そうこう考へていて、目の前の闇が薄らぎ、徐々に周りが見えてきた。きっと、数が何とかしてくれたんだな。靈を祓つて。だが、闇が完全に消えたそこに数久やゆずるの姿はない。代わりに目に映つた人物は見知らぬ少女だった。

「誰？」

気付くと互いに問うていた。思わず、笑つてしまつ。

どうやら少女にとつて、直久の方が、突如現れた怪しい人物らしい。

「俺は直久。君は？」

床に膝を着いてしゃがみ込んでいた直久は、ゆっくり立ち上がり、辺りを見回した。

「ここは？」

一見、さつきまでいた場所となんら変わらないように思えた。だが、時々しか掃除しないさつきまでの廊下と違い、よく整い、埃一つない。薄暗く、全く人の気配がしなかつたはずなのに、ここは明るく、どこからか人の声が騒がしく聞こえている。いかにも人が住

んでいます、って感じである。

驚いて立ちつくしている少女に、直久は歩み寄った。一歩一歩近づくにつれ、その顔がはつきりと見えるようになる。はつ、として直久は歩みを止めた。あの長い廊下に飾つてあった少女の絵と同じ顔をしていたのだ。

どういふことだ？

直久はゴクリと咽を鳴らした。

「君、ツバキ……さん？」

少女は再び驚いたような顔をして、首を横に振つた。

「私はアヤメ。ツバキは私の姉よ」

そこでようやく直久は、少女 アヤメの瞳が濡れていることに気が付いた。

「かわいそうで、哀れなツバキ。死ぬために生まれてきたの」

アヤメはふと、不思議そうな瞳を直久に送つた。

「どうして、ツバキを知っているの？ それに、あなた、いつたいどこから現れたの？」

直久は言葉に詰まる。直久自身が聞きたい。

「ここはどこなのか？ 自分はどうなつてしまつたのか？」

「ツバキさんの絵を見たんだよ。白い椿が咲く庭の」

「ああ、時也さんが描いている絵ね」

「時也……さん？」

「ツバキの絵描きよ。ツバキと私は双子なの。両親だつて間違えるほどそつくりなのに、時也さんは間違えたりしないのよ。ツバキはツバキ、アヤメはアヤメだつてね」

どつかで似たようなセリフ聞いたなあ。

「もうすぐ、その絵が完成するでしょ。だから、みんな、儀式の準備に忙しいのね。あなたみたいな不審者が入り込んで、まるで気付かないわ」

と、アヤメはくすくす笑う。

その不審者と平然と話しかやつているあたり、世間知らずの深窓

のお嬢さんつて感じがする。

普通、突然、見知らぬ人が現れたら、驚いて騒ぎ立てるものじやん。

驚くまではしたが、全く騒ぐ様子がない。その口調は旧知の友人と話しているようだ。

まつ、こっちも気楽でいいんだけど。

「儀式つていうと？」

「山の神様に生け贋を捧げる儀式よ」

「それ、いつ？」

「絵が完成したらよ。明日じゃないかしら？」

「明日！」

直久は拳を口元に押し当てる。

ツバキって、やっぱし、あの、最後に生け贋にされるはずだった少女のことだよなあ。

そのツバキが生け贋にされる儀式が明日あるってことは……。

「なあ、いま何年？ 何年何月何曜日？ ついでに何日？ あああああああああああああ～っ！ もしかしたら、俺、タイムスリップしてやつ？ タイムスリップかよ！ おい！ しちまつたのかよ！ マジでえ～？」

突然叫ぶわ、頭を抱えて飛び回るわ、びざく取り乱した直久にアヤメは啞然とする。

「どうすりやあ、帰れるんだ？ なんかの映画だと雷に当たると車がウイーンって動いて帰れるんだけどなあ。そいや～、なんかのドラマで同じ衝撃を受けたら帰れたって話があつたな。同じ衝撃、同じ、って言つてもな～。靈と衝突した場合はどうすりやいいんだあ？ この場合同じ靈じやなきやいけないとか？ すると、探さないといけない一つことだよな。あーつ、でも、ここではまだ生きてるんだつけ？ しかも、ツバキなんだかアヤメなんだか分からねえーっ

「あなた、さつきから何言つてるの？」

その、アヤメの声で我に返ると、直久はきつとしてアヤメに振り返った。

「アヤメさん、何かお困りではありますか？」

「はあ？」

「俺がここに来ちゃったのって、ここに原因があるからだと思つんだよね」

たぶん、あの靈がここに連れてきたんだ。ここに、この時間に何かしらの憂いがあるから。

それを解決してやれば、俺は戻れるし、靈も浄土に行けるはず。

「俺、アヤメさんを救いに来たんだ。だから困つてこない? 俺を助けるつと思つて何でも言つてくれ」

「はあ？」

アヤメは怪訝な顔をする。

「何それ。いつたい、どつちがどつちを助けるのよ？」 それに、

私、全然困つてないから。助けるのなら、ツバキの方でしょ。ツバキ、明日生け贋にされちゃうのよ。きっとツバキの方が救われたがつているわ

「でも、泣いていたのは君だから」

直久の言葉に、アヤメの顔がカーと赤くなる。

「泣いてないわ！」

「君を、アヤメさんを助けたいんだ。必ず守るよ。例え、どんなものからも。だから、なんで泣いていたのか話してくれないかな？」

「泣いてないつてば！」

アヤメは直久に背を向け、つかつかと歩き出す。

例の、妃緒が舜の部屋だと言い張った部屋に入ると、直久の目の前でバタンと音を立てて扉を閉めた。

「ちよつ、ちよつとアヤメをーん。開けてよおー。俺、びついたらいいんだよおーつ」

しばらく直久の間延びした声が廊下に響いていたが、その後、再びパタンと扉が閉まつた時には、直久の姿はそこからなくなつてい

た。

「直久！」

「直ちゃん、しつかりして！ねえ、直ちゃん！」

直久の身体は、ゆずるの腕の中でぐつたりと横たわっている。その顔は血の気がなく、蝋人形を思わせるほどに青白い。次第に冷たくなつていいくその身体を、ゆずるは暖めるように力一杯に抱きしめた。

「なんで！ なんで、俺の前につ。」の馬鹿！」

自分と直久が仲良しとは、けして言えなかつたはず。 「いや、それどころか、嫌われていたはずだ。

……なのに。なぜ？

「数、すぐに直久から悪靈を引き離せ。お前のポリシーなど聞かない。強制除霊しろ。抵抗したら、消滅させてしまえ！」

ゆづるに頷いて見せた数久だったが、靈を祓うだけの余力などなかつた。 数久の頬を汗が伝う。それでも、できないなどと、今のゆづるに言えなかつた。

数久が小刻みに震える手で印を結ぼうとした時、舜がそれを制した。

「やめておけ、今の君には無理だ。下手に靈を刺激すると、事態はよけいに悪化する」

そこでようやく、ゆづるは彼の存在に気付いたよつて、彼を睨み付けた。

「黙れ、部外者が口を挟むな」

「ゆづる、この方は山の神だよ」

「それがどうした？ 俺は九堂家次代当主だ。そこらの神々よりも強い力を持つている。昔、生け贋を捧げられていたらしいが、

だからなんだつて言つ? それで、その程度の力か? 「

「ゆづる、口が過ぎるよー。」

「いや、いい」

青ざめた数久に舜は柔らかく微笑んで、ゆづるに細くした目を向ける。

「なるほど、九堂家の方であつたか。靈がその身体を器にしたがるもの分かる。だが、確かに九堂家の次代ならば、そこらの神々吾などよりも強いであろうが、そなた、まことに次代か? 汚れた血の臭いがする。そなたはおん……」

「黙れ!」

顔を赤らめ、舜の言葉を遮るゆづる。

「それ以上、口にすることは許さない!」

肩で荒々しく息をするゆづる。舜はゆつくりと首を横に振つた。

「何か訳があるようだ。ならば、聞くまい」

舜はゆづるの腕の中の直久に目を移す。

「そなたが次代ならば、知つていいだろ? 彼は体内にいつたい何を飼つていてるのだ?」

「……」

「彼の体内に侵入して來た異物 少女の靈をソレが徐々に吸収していっているようだ」

「どういうことですか?」

舜は問い合わせてきた数久の方に振り向くことなく、直久の死人のような寝顔を見つめたまま、分からないと答えた。そして付け加える。

「彼はソレから少女の靈を守りつつとしているようだ」

物語の主人公は、いつも可哀想なお姫様。

悪い魔女に虐められたる哀れなお姫様。

お姫様は無垢で可愛らしく。

疑うこと、恨むことも、知らない。

愚かで無知なお姫様。
誰もが哀れる。

私はお姫様ではない。

彼女を哀れむ立場であり、実際、彼女の不運に涙した。

だけど、なぜ？

なぜ、物語の最後にきて、彼女を羨ましく思うのか？
物語の最後だけ、彼女に入れ替わられたらと思つてしまつのは、なぜだらう？

アヤメ　彼女の日常は、扉を叩くことから始まる。
屋敷の、他のどの扉よりも幾分も分厚く、重いその扉を恐々と叩く。

「ツバキ、いるの？」

アヤメがその扉を開くことはない。毎朝、毎朝、彼女はただその扉を叩くだけなのだ。

しばらくして、扉の向こう側から「ン」と返事が返ってきて、アヤメはホッと息を漏らした。

もし、返事が返ってこなかつたら……。そう思つて、叩くことを躊躇つこともある。

だが、もし、ツバキが逃げてしまつたら、アヤメが生け贋にされてしまうのだから。

もし、ツバキが逃げてしまつたら、アヤメが生け贋にされてしまうのだから。
アヤメのドロドロした心を晴れ渡せるような声が高々と響いた。
まだ10歳にも満たない幼い弟 アカネが、自分の細腕を二十歳は超しただろう青年の腕に絡ませ、半ば引っ張るようにしてこちらにやってくる。

青年のスラリと伸びた背丈や、じくへ整つた顔立ちは、田舎娘の小れい心臓を易々と高鳴らせる。

「おはようござこます」

アヤメの存在に気付いて青年は、ぺこりと頭を下げた。

アカネもアヤメに気付き、彼女に駆け寄るとその腰回りに抱きついた。

「おはよう、姉さん」

「おはよう、アカネ」

アカネを抱きとめたアヤメは赤らんだ頬で、青年を見上げる。

「時也さん、これからお仕事？」

「ええ」

青年 時也は上着のポケットを探り、銀色に輝く鍵を取り出した。

「あと、どのくらい？ 今日こは、描き終わるのかしら？」

知らず、声が上擦る。1秒でも長く彼と話したい。彼を引き留めていたかつた。だが、時也は、

「ええ。今日中には、描き終わりますよ」

と、短く答え、扉を開け、中に消えていった。ツバキの元へ。

仕方ないのだ。彼はツバキの絵描きなのだから。

以前、彼はアヤメにも絵を描いてくれていた。赤い椿の花が咲く庭を背景にしたその絵を父親が気に入り、ツバキの生前の姿を描く

ようとに時也に依頼したのだ。

絵が描き終われば、ツバキは死ぬ。生け贋にされるのだ。そのことを知る彼の筆はひどく遅かった。

アヤメは時也の背中を隠した扉にため息をついた。時也がアヤメの熱い視線に気付くことはなかった。彼にはツバキしか見えていなかつたのだから。

扉の中に入ると、すぐそこは階段となつていて、部屋自体は地下にあるのだ。窓のようなものは一切なく、時也が手にする明かりのみが部屋を照らしている。

一段一段降りていくにつれ、気温まで下がつていいくようだつた。一応、人が住めるような造りをしているが、そこはまるで牢獄であった。

「ツバキ」

時也が優しく名前を呼ぶと、その囚われの少女がふわっと微笑んで彼を迎えた。

生まれてから、一度もこの部屋から出たことのない彼女は、どんなに外の世界が汚れていようと、人の心がいかに醜かろうが全く関係なく、清らかにそこに存在している。

無垢で、可愛いツバキ。

ツバキを前にすると時也は堪らなくなる。

この少女を連れて逃げられたら……。

科学が進んだ近代で、やれ祟りだ、やれ呪いだと信じる者は少ない。まして、山の神に生け贋を捧げないと村が滅亡するなどと、本気で信じている者などいない。

儀式を主催者である彼女の父親自身さえ、信じていないだらう。だが、家のため、利益のために実の娘を殺そつとしている。なんて馬鹿な話だらう。

助けたい。

ツバキを助けたい。

そして、自分の手で、今までの分でも、幸せにしたい。
時では、自分の腕の中で、今でも十分の幸せだよ、とでも言い出
しそうな顔をしている少女の額に甘く口付けた。

もう、ずっと前から知っていた。

気付いていたのに、認めたくなくて、目を閉じて、見ない振り
して、耳を塞いで、聞こえない振りをして、そして、自分に嘘をつ
いていた。

だけど、どうしようもない。彼はツバキを愛しているのだから。

だけど、でも、どうして！ 私とツバキは双子なのに！
同じ顔、同じ声、同じ、同じ、同じ、同じ……。

なぜ、私じゃないの？
私のどこがダメなの？
私とツバキとどこが違うの？

可哀想で、哀れなツバキ。

それなのに、なぜ？

私がツバキを羨ましく思つてしまつのは、なぜ？

泣き疲れたのか、寝入つてしまつたアヤメの黒く長い髪を、流れ
に沿つようにそっと撫でて、直久はアヤメの部屋を出た。
途方に暮れたい気分だった。

長々とアヤメの恋愛相談に付き合わされ、本当に彼女を恋愛経験
0の自分が救えるのかと不安になつてきた。いや、それ以前に、自
分をここに呼んだのは、本当に彼女だったのだろうか？

アヤメ自身が言つていた通り、ツバキだつたのではないだろうか？

ツバキつて子の方にも、会つておいた方がいいな。

ツバキが扉敷のどこにいるのか？……は考え悩む必要はない。

あの部屋だ。

生け贅にされる少女が代々使つていたという、開かずの扉の部屋。そこへ行くまでの間、直久は何人もの人々とすれ違つた。確かに、皆が皆、忙しそうに直久の脇を通り過ぎていつたが、アヤメの言うように、ただ単に忙しすぎて直久が紛れ込んでいるのに気付かないと言つとのと違つようであつた。

そう、まるで、直久など存在しない、見えていないかのようにすれ違つて行くのである。

やはり自分を見る事のできるアヤメが、自分をここに呼び寄せたのだろうか？

開かずの扉の前にたつた直久は腕を組み、小首を傾げた。

この時代では、開かずの扉はその名の通りの『開かず』ではなく、鍵さえあれば開くのであるが、その鍵を持たない直久にとつて、やはり扉は『開かず』なのである。

どお～したもんだかなあ～～。

ツバキが扉の向こう側にいる限り、当然、扉を開けないと会えないものである。

その時、急に直久は目眩を覚えた。

なんだ？

全身に鳥肌が立つ。憎悪。拒絶。恐怖。

訳は分からぬが、本能的にここから逃げなくてはと思つ。だが、その思いとは裏腹に、直久の足は一步も動かない。

どつ、と冷や汗が溢れた。

扉の向こう側から、かすかに少女の笑い声が聞こえる。嘲るような、そんな笑い声だ。

直久の目が扉に釘付けにされる。見たくなりのに……。

すーっと、白く美しすぎる手が扉を突き抜けて現れた。続く腕が

直久の方に伸ばされる。

がしつゝ、とその手に捕まれて直久は、バランスを失いその場に尻餅をついた。

引っ張られる！

前の晩、ゆずるがそうされたように、足首をもたれ、ズリズリと扉の方へ引き寄せられていく。

直久は自分の足首からその手を引き離そうと、上半身を折り、手を伸ばした。

直久の手がその白い手に触れた瞬間、青い火花が散り、ジュツという音と共に黒い煙が上がった。

そして、次の瞬間、フッと白い手が消えたのだ。

な、なんだ？

恐る恐る自分の手のひらを見ると、直久は安堵のため息を深くつく。そこには数久の護符が描かれていた。

7・俺は何もしていない

アヤメの部屋に戻った直久は、その扉の前で、アヤメの他に誰かいるということに気が付いた。ドアノブに伸ばした手を思わず引っこめる。

「最後の思い出を作つて差し上げたいのです」

部屋の中から聞こえてきた声は低く、明らかにアヤメのものではない。青年の声だ。おそらく時也だろうと直久は推測する。

「ツバキさんのためにも、あなたのためにも、その方が絶対にいい

力強く言い切つた彼に、アヤメは飛び切りの笑顔で頷いていた。

「では、今晚」

「はい」

直久が躊躇つた扉が、時也の手によつて開かれる。彼は直久を無視するように、すぐ側を通り過ぎていった。

入れ替わるようにして部屋に入つた直久は、先程の笑顔の『え』の字の欠片もなく、暗い顔を見せているアヤメに歩み寄る。

「彼は？」

「時也さんよ」

「やつぱり。で、なんだつて？」

アヤメは近寄ってきた直久に一瞥し、すうつと離れるように歩き出す。

一人で寝るにしては大きいベッドに腰掛けると、後を追つてきた直久を上田遣いに見つめた。

「深夜にお茶会ですつて。あの部屋で、ツバキのために」

「お茶会？」

「深夜に一人きりで会うのは、さすがに気が引けたのでしょ。第一許しが出ないわ。一人で逃げるのではないか、ってね。私を引き込

んで、許しを貰つたに違いないわ。ツバキと最後の別れを惜しむために。
……ひどい人ね

ひどいと分かっていても、どんなに傷つけられても、彼の前では自然と笑顔で答えてしまうアヤメが、哀れだった。

覚悟を決めたようで、アヤメはベッドから立ち上がり、タンスの中からお気に入りの服を何着が引っ張り出し、ベッドの上に並べた。

「どれがいいと思う？」

「どれでもいいんじやん？」

直久に言わせると、どの服も全部同じに見えるのである。どの服も鮮やかに赤い。

「なんで、赤い服しかないわけ？」

直久は眉を歪ませ、開け放たれたタンスの中を見回した。
似合わないことはないけど、赤ってイメージじゃないんだよねえ。

「これ、これがいいよ」

と、直久が引っ張り出した服は無地の白い服。

「それえ〜？」

アヤメはあからさまに不服そうな声を上げた。

「私のイメージとは違うわ。白はツバキの色、私は赤なのよ

「何それ？」

「そう、時也さんが言ったの」

直久にしては珍しく不機嫌丸出しの顔になる。

「だから、それは時也さんの勝手なイメージだろ！ 確かに、俺が、アヤメさんは白だって言うのも勝手なイメージからだけど。だけど、今、アヤメさんは俺に意見を聞いただろ？ アヤメさん自身の好みで断られるならまだしも、なんで時也さんの勝手で俺の意見が却下されちゃうわけ？」

「……分かったわ、着てみる」

強い口調で言い張った直久に負け、アヤメは直久の方に手を伸ばした。

手に持っていた白い服をアヤメに手渡そうとした時、直久は差し出された手に、はつとなつた。

「何？」

自分の手の甲に目を釘付けにされている直久にアヤメは不思議そうに見つめ返す。

その瞳があまりにも澄んでいて、直久は口籠もる。

「なんでもない」

だが、確かに見てしまったのだ。アヤメの手の甲にある火傷の痕を。

まだ新しい傷らしく、赤く腫れ上がっていた。そして、その傷の形が、数久に描いてもらつた直久の手のひらにある護符の模様とまるで同じであつたのだ。

白い服に着替えたアヤメは、直久の前でぐるりと回つて見せた。

「似合つよ

自分の顔が引きつってやいないかと不安になる。だが、アヤメは直久に目もくれず、鏡の中の自分をじっと睨んだ。

「私じやない。これはツバキよ

そして、ため息をつく。

扉が軽い音を鳴らせた。

「誰？」

びくつと振り返ると、すぐにその答えが返つてきた。

「僕だよ

「アカネ？」

「どうしたの？」

さつと扉を開けたアヤメが、アカネと目線が合ひ合ひようとかがむ。

アカネは無言でアヤメの首に抱きついた。

「どうしたの？」

背中を優しく叩きながら再び尋ねてみると、ようやくアカネの弱々しい声が返ってきた。

「お願いだから、お茶会に出ないで

「え？」

「時也とツバキの奴が変な」と言つていたんだ。姉さんがツバキになつて、ツバキが姉さんになるつて。それで、逃げるんだつて「どう……い……う……」と?」

アヤメの目の前が暗くなる。

「僕、聞いちゃつたんだ。二人が話しているところ。今晚のお茶会で姉さんに睡眠薬を飲ませて、姉さんが眠つているうちにツバキを連れて逃げるつて。姉さんをツバキの代わりに、あの部屋に閉じ込めて、生け贋にするつもりなんだ！」

直久はアカネの話しに、口元に拳を当てて考え込む。

そう言えば、ツバキは絵描きと駆け落ちしたつて妃緒ちゃんが言つていたつけ。

そうか、アヤメをツバキの身代わりにして、人の目を『まか』している内に逃げてしまおうとしたわけか。

「僕、嫌だよ。姉さんがツバキの代わりに生け贋にされちゃうなんて」

アカネは見ればすぐ分かるように、同じ姉にしても、ツバキよりもアヤメのことの方が好きのようだ。

いや、むしろツバキを姉とは思つてもいよいよ口振りである。

おそらく、二人の話を聞いた彼は、何の考えもなく、即、アヤメの元へ駆けつけて来たに違いない。

アヤメは、そんなアカネを力一杯に抱きしめた。

「大丈夫よ。絶対に逃がしやしないんだから。私に考えがあるの」

その時、直久はアヤメの瞳に燃えるような光を見た。

「私が時也さんと逃げるわ」

同じような白い服を着た少女たちが、全く同じ顔立ちをして、そこに静かに座っていた。

「どうぞ」

時也は、ほんわりと湯気が立ち上る紅茶を小さいカップに入れて、アヤメに差し出した。

カップの中で紅茶がよい香りを振りまきながら、小さく波立つ。その、時也の優しげな微笑みに、直久を腹が煮えくり返る思いを覚えた。

アヤメさんが可哀想そう。あんまりだ！

おそらく、その紅茶の中に睡眠薬が入っているに違いない。

よりによつて好きな人に騙されるなんて。

彼の偽りの微笑みを、偽りと知つてゐるアヤメが、どのように受け取つたのかと考へるだけで、胸がつぶれそうだった。

今更思つことだが、一卵性双生児は本当によく似てゐる。そつくりである。

特に今のツバキとアヤメは同じ服装で、黙つて座つていれば、おそらく互いにしか区別がつかないのではないかと思つ程そつくりだ。

その区別も、自分が自分であると信じることに基づいてゐる。

だから、自分が自分であると確かに言えなくなつた時、自分ではなくなることもあります、また、片割れの存在をも疑わしくしてしまつこともある。

つまり、アヤメが自分をツバキであると言い張つた時、それを証明できるものがないのと同時に、ツバキがツバキだと確かに証明するものもないということ。

アヤメがアヤメであるから、ツバキがツバキであり得る。

周りにいる者たちは、2人が言つたことを信じるしかないのだから。

そこまでそつくりな二人ならば、入れ替わることなど容易いだろう。

マジでやる気なのか？

「口しながら、カップに口を付け飲む振りをするアヤメを横目に、直久はそつとため息をついた。

自分と数久もよく入れ替わって周りの人を驚かせたものだ。

だけど、それは長くとも一日の間の話で、一生数久として生きようとは、直久は思わない。

自分は自分だ。数久ではあり得ない。

例え、元々は1つだったとしても、2つになってしまった以上、2つとして生きるしかない。

そうと分かつていても、時々、自分ではあり得なくなってしまつたもう一人の自分を取り戻したくなる。

そう、だから、入れ替わるのだ。

数久の振りをして、数久の世界を知る。数久が見ているものを知る。そして、改めて知る。自分は直久だ。

個としての自分。数久との間に分厚い壁を感じる。他人と同様の分厚い壁を。

アヤメは、今、その壁を破り、ツバキになろうとしているのだ。直久の目に、アヤメがツバキのカップに紅茶を注いでいるのが映る。睡眠薬を入れている手の動きまでも。

アカネが姿を見せたのは、その時だった。

「あら、どうしたの？ アカネ」

「時也に用があるんだ」

「僕に？」

「なんだい？」と歩み寄った時也の腕を、アカネが引っ張る。

「ちょっと来て。僕の部屋で変な音がするんだ」

「へんな音？」

アカネのその行動は、アヤメの指示通りであった。そして、そ

の思惑通りに、時也が部屋を出でていってすぐに、ツバキの躰が傾いた。アヤメはツバキの側にしゃがみ込み、眠りに落ちていくツバキの服を脱がせる。

「私がツバキよ。アヤメの振りをして時也さんと逃げるの。あなたはアヤメ。ツバキに騙されて、身代わりにされた可哀想なアヤメ」最後の方は、堪えきれずに溢れた笑い声になつていた。

ツバキの服を自分で着ると、自分の服をアヤメに着せる。

「アヤメさん」

廊下に出ていた直久は、時也の戻つてくる姿を見つけ、アヤメにそのことを知らせる。

アヤメはしずしずと部屋から出てきた。

その表情は、アヤメに対してもまないことをしたというツバキの後悔の表情だつた。

「……時也さん」

「ツバキ、アヤメさんは？」

時也の問いかけにアヤメは、ゆっくりと首を縦に振る。これに頷き返し、時也は上着から銀色の鍵を取り出した。

力チ。

小さい音が鳴る。

「さあ、行こう」

差し出された時也の手をアヤメは、本当に本当に、嬉しそうに受け取つた。

二人は駆けだした。

すれ違ひざまに、ありがとう、といつアヤメの声が聞こえた気がして、直久の膝がガタガタと震えた。

妙にその言葉が、その響きが、後を引く。

「ありがとうだなんて……」

「俺は何もしていない。」

複雑な想いで、アヤメと時也の、みるみる小さくなつっていく後ろ姿を見つめる。

本当にこれで良かつたのだろうか？　これで少女の靈の憂いを晴らすことができたのだろうか？

でも、だつたら、なぜ？　どうして元の場所に戻れないんだ？

憂いが晴れてないから？

やっぱり俺はまだ何もしていらないんだ！

直久は爪が手のひらに食い込むくらいに強く拳を握りしめた。

これからなんだよ。これから何かしなきゃいけないんだ！　俺が、きっと！

直久の躰は、直久が何か考えるよりも早くアヤメの姿を追つて駆けだしていた。

アヤメさんはアヤメさんじゃないか。一生ツバキの振りをし続けるなんて無理に決まっている。アヤメさんはツバキじゃないのだから。

やめさせよう、そんな馬鹿なこと。

アヤメと時也を追い駆ける直久に、おそらく、この冬最後の雪がハラハラと舞い降りた。

8・だから絶対、助け出す！

アヤメの手を引いていた時也の足が、不意に止まった。辺りは闇に覆われ、降り積もる雪の音だけが静かに響いていた。

どうしたのだろう？　と時也を見上げるアヤメ。そのアヤメの顔を時也は、じつと見つめた。

「ツバキじゃない」

小さく漏れたその言葉にアヤメは青ざめる。時也はアヤメの手を振り払った。

「どうして……？」

「違和感があつたのです、あなたの手を握りしめた時。それが次第に強くなつて」

「なんで！」

アヤメは咽が裂けるほどに叫ぶ。

「私とツバキなんて、どっちだつていいじゃない…どっちだつて一緒にじゃない！」

「違う！」

時也は忙しくなつた息遣いを整えて、もう一度アヤメの言葉を否定する。

「あなたじゃない。僕が愛しているのは、あなたじゃないで、ツバキだ」

アヤメは頭を殴られたような衝撃を受けて立ち尽くした。

次第に雪が強く降るようになつてきていた。視界が悪く、すぐ近く、手を伸ばせば届くくらいの距離にいるはずの時也の表情さえ、アヤメには分からなかつた。

雪のせいだけではない。熱く、潤んだ瞳のせいでもある。

一歩は時也の方へ伸ばしかけた手を、諦めるかのようにアヤメは下ろした。

「アヤメさん！」

不意に呼ばれて振り返ると、そこに直久が息を切らせて、前屈みに立っていた。

なぜだろうか？

側にいるはずの時也の姿は全く見えないといつに、少し離れた直久の姿ははっきりと浮き出ているように見える。

「アヤメさん。やっぱり、俺さ。どんな格好をしていても、どんなにうまくツバキの振りしていても、アヤメさんはアヤメさんだと思う。ツバキがこの世にツバキ一人しか存在していないように、アヤメさんだって一人しかいないんだ。だから、もし、何百ついて

う人がさ、アヤメさんの振りをしていて、それがもう、すっげえそつくりだつたとしても、アヤメさんを探し出すことができる人は必ずいるんだ。ツバキにとつては、その人が時也さんだつたんだよ。

だから、アヤメさんが、どんなにうまくツバキの振りをこなしでいても、時也さんにはバレてしまうんだ。ダメなんだよ」

直久はそう語りながら、ゆっくりとアヤメに歩み寄り、その肩にそっと手を置いた。

「やめようよ。自分を押し殺すことなんかさあ。アヤメさんにとっても、たつた一人の誰かが絶対、必ず現れるから。その時にアヤメさんがアヤメさんじやなくて、どうすんだよ！」

静まりかえた闇の中で、直久の言葉は教会の鐘の音のように高らかに響き渡った。

直久の必死の言葉にアヤメは少し俯く。そして、そのまま小さく頷いた。

「……分かったわ。ツバキを解放していく。でも、逃げることないわ。父を説得して、生け贋なんてやめさせるから」

「そんなことが？」

いつの間にか、視界がはっきりとして、時也の顔もはっきりと見える。

アヤメはその顔を見つめて、言い切った。

「できるわ！ やるしかないもの。時間はかかるかもしれないけど。

でも、そうね。父が納得するまでツバキをどこかに隠さなければならぬわ。やつぱり、しばらく村から出ていた方がいいわね、二人で」

アヤメは時也にくるりと背を向ける。
「ここで待っていてください。必ず、ツバキを連れてきますから」
きつぱりと言い切った彼女の顔は、まるで憑き物が落ちたようにすつきりと綺麗だった。

直久は真っ黒い空を見上げた。四方から吹き付けてくる雪は、冷たいと言うより、むしろ痛い。

まるで、何千何万本という針が降り注いでいるかのように。

直久は前を駆けるアヤメの姿に目を細めた。

ツバキの部屋にたどり着くと、アヤメは時也から受け取った部屋の鍵を手にして直久に振り返った。

直久が頷いてやると、アヤメは震える手で鍵を鍵穴に差し入れた。

「ツバキ？」

扉が重々しく開く。

「いるんでしょ？ ごめんね、ツバキ」

部屋に入つていいくアヤメの後に続こうとした直久だが、なぜか体が動かない。金縛りにあつたみたいに、声をえ出ない。

なんだか、嫌な予感がする。

遠ざかっていくアヤメの姿が妙に目に焼き付いた。アヤメはツバキの姿を見つけて駆け寄る。

「ツバキ、ごめんね。もう、いいの、あなたが犠牲になることないのよ。協力するわ。時也さんと一緒に逃げて。ねつ」

アヤメは今まで、そうできなかつた分も込めて、心からの笑顔をツバキに送つた。そして、伏しているツバキに手を差し伸べる。

「さあ、立つて。時也さんがあなたを待つているわ」「ありがとう」

その手を取つて、ツバキは、ふわっと微笑んだ。

「ありがとう、もう一人のツバキ」

「え？」

暗闇に、キラリと赤い光が見えた気がした。それがツバキの瞳であつたのだと分かるまで、ずいぶんと時間がかかった。その間に強く手を引かれ、その場に倒れる。

床に打ち付けられ、状況が理解できずに横たわっているアヤメから、ツバキは鍵を奪い取る。そして、扉に駆け寄つた。

「ツバキ！」

よろめきながらも、咽が裂けるほど、アヤメは叫ぶ。
どうして？ なんで？

少し振り向いたツバキは、ぞつとするほど綺麗な笑みを見せて、アヤメを絶望の淵に陥れた。

パタン。

閉められた扉に鍵がかけられる。あまりのことにして、自分の身に何が起きたのか分からずについたが、その音に、はつとなり、この部屋唯一の扉に駆け寄る。

「待つて！ ツバキ、待つて！」

何度も、何度も、扉を叩く。

「お願い、出して！ 出してよー！」

ツバキの部屋 生け贋にされた何人もの少女たちが使つていた部屋だ。

静かな闇に支配された部屋。
怖い。

アヤメは自分の身体をぎゅっと抱きしめた。

嫌、こんなところにいたくない。

ツバキ、どうしてこんなことするの？ なんで？

お願ひだから出して！ お願ひよ！

直久は部屋から出てきた少女を見据えた。アヤメそつくりな少女。だが、アヤメではない少女。

少女、ツバキは扉に鍵をして、直久に向き直った。

「今までの私の苦しみを、味わつて貰わないとな」

ふふつ、と可愛らしい笑みを浮かべるツバキに反して、直久は青ざめる。

ツバキには見えていたのだ。直久の姿が！
ずつと見えていたのか？ 見えていて、見えない振りをしていた
？ 何のために？

「あなたをここに呼んだのは、私よ。あなたを必要としていたのは私。べつに、私に協力してくれるのなら、あなたじゃなくても良かつたのだけど、結果的にあなたで正解だつたかもしれないわね。ありがとう」

そう笑つて、ツバキは直久に背を向けて時也の元に駆けだした。
取り残された直久はその場に膝を折る。

そんな……まさか……。

俺をここに呼んだのが、ツバキだつたなんて。

ツバキは知つていたんだ。俺がアヤメを連れ戻すつて。アヤメを連れ戻して貰うために、俺を呼んだのだから。

じゃあ、ゆづるを襲つた少女の靈はツバキだつたのか。

本当は俺ではなく、ゆづるにここに来て貰いたかったのだ。アヤメを連れ戻して貰うために。

ゆづるはちゃんと知つていたから。

いくら双子が同じ顔、同じ声を持つても、それぞれ一人一人、違う人間だということを。

いや、待てよ。アヤメを連れ戻して貰うために呼んだのなら、もう用はないはずだ。

それなのに、なんで、まだ元の場所に戻れないんだ？
まさか、と思つて扉に駆け寄る。

「アヤメさん？……アヤメさん、聞こえる？」

扉の向こう側に向かつて声をかけると、すぐに返事が返ってきた。

「直久？ お願い、ここから出して…」

重く頑丈な扉は、鍵無しでは、そういう簡単には開きそうにはなかつた。

「待つてて。鍵を取り戻してくるから」

アヤメのすすり泣く声が聞こえる。

俺を呼んだのがツバキだとしても、俺は必ず守つてやるつて、アヤメさんと約束したんだ。

助けてやる、つて。だから絶対、助け出す！

「待つてて、アヤメさん。絶対、大丈夫だから」

「……うん。待つてる」

時刻は深夜0時を回っている。いつの間にか、日付けは、生け贋の儀式が行われる予定の日になつていた。

アカネはベッドの上で、何度も分からぬ寝返りを打つた。

大好きな姉 アヤメがツバキの身代わりにされ、生け贋にされてしまうなど、耐えられないことだつた。

だから、時也の計画をアヤメに教えたのだが、まさかそのことで、アヤメが時也と逃げるだなんて言い出すとは、思いもしなかつたアカネだ。

姉さんが遠くに行つてしまつ。

アカネにとつて、アヤメが自分から離れてしまつた方が、よほど耐え難いことだつた。

「口、口とベッドの上を転がつているつむ、よつやく一つの笞えにたどり着いた。

お父さんに話してしまおつ。そして、姉さんを連れ戻しても

らうんだ！

かくして、アカネの話を聞いた彼らの父親は、村人たちに時也とアヤメの行方を捜すように命令を下した。

その手に銃を持つて……。

彼は、アカネの話を全て聞いていたので、この時、時也と一緒にいる少女はアヤメだと信じて疑わなかつた。

「そのうち、どこかの金持ちに嫁がせようと思つていたが、なんて恥知らずな。よりによつて画家なんかと駆け落ちするとは」と、苦々しく言い捨てたのだ。

彼にとつて、娘はツバキにしても、アヤメにしても、御家発展のための手駒だつた。

それでも、生け贋に捧げるツバキなら銃まで取り出さなかつただろつ。

だが、絵描きなんかと駆け落ちしたという傷を負つたアヤメは、適當な家に嫁に出すという望みを失つてしまい、駒としては使い物にならなくなつてしまつたのだ。

彼は白い服を着た人形のように美しい少女を見つけると、有無も言わせず引き金を引いた。

いくつかの銃声が痛々しく辺りに響いた。

雪に呑まれるようになれ込んだ一人の回りに、幾重もの人垣ができていた。だが、誰一人として、その二人に手を貸そうとする者はなかつた。

ただ、じつと、一人が息絶えるのを見つめている。直久が駆けつけたのは、そんな時だつた。

重たい雪が一人を隠していく。

な……お……ひ……さ……。

ツバキの声が聞こえた気がして、直久は人垣をかき分け、彼女に駆け寄った。

彼女の背中から血が噴き出し、流れ、彼女に白い服を赤く、赤く染めていく。

それは、この白い雪の上に、妖しいほど美しい寒椿の花のようだつた。

美しく咲いた次の瞬間、ポトリと地面に落ちるその花を、人々は首が落ちるようだと気味悪がるが、本当にこの花は美しいのだ。白の上に浮き出るような鮮やかな朱。

悲しくも、切なく、美しい色。

「なあ……ひ…さ」

ツバキの、紫色になってしまった唇が小さく動く。自分に伸ばされたツバキの手を直久は膝を着いて受け取った。優しく両手で包み込む。

これでいいの。私はこれでいいの。

ツバキの気持ちが直久に伝わってくる。

幸せなの。これが私のハッピーランドなの。分かるでしょ？
自由を得たの。愛した人と死ねるの。ずっと一緒にいられるの。
ツバキは、直久の手に鍵を押しつけた。それを受け取って、直久は、はつとする。

ツバキの手の甲に火傷の傷があつたのだ。数久の護符と同じ形の火傷の傷が！

アヤメの手の甲にあつた者よりも、ずっとひどい傷だった。
どういうことだ？

訳分からずツバキの顔を見ると、もはや死人のように血の気がない。

直久は黙つて頷くと、鍵を強く握り締め、その場から駆けだした。

直久が遠くなつていいくを感じながら、ゆっくりとツバキは目を閉じた。

確かに、私とアヤメは別の人格の人間。

だけど、他人とは持ち得ない繋がりを持つている。自分と相方との区別をあやふやにしてしまうような何かを。

そして、それが、相方を、もう一人の自分と呼ばせていた。

ツバキは手の甲の傷のことを思つ。

だから、自分が幸せなのではいけない。

もう一人の自分も幸せでなければ、本当に自分が幸せであるとは言えないのだ。

アヤメも自由にしてあげて！

アヤメを解き放つて！

アヤメを幸せにして欲しい。

アヤメは私。

私の光。

私ではない私。

私とはまるで違う少女。

アヤメはアヤメ。

どうか、彼女を見つけて。

お願いだから、どうか、彼女だけを見つめて欲しい。

9・青空が広がるその下で

直久は、体が急ぐ、重くなつていいくのを感じた。思つよつに走れない。

心なしか、辺りの景色がぼやけていくよつに思える。

待つてくれ。もう少しだけ。彼女の元にたどり着けるまで。扉が見えた。アヤメのいる部屋の、あの、生け贋にされる少女たちの部屋の扉が。

だが、その時、襲いかかるよつに白い光が直久を包んだ。

「直久！」

薄く開いた目に真つ先に飛び込んできたものは、青ざめたゆする顔だつた。続いて数久の顔。

「直ちゃん。よかつた、気が付いて」

直久は一言も発さずに、自分を抱きしめていたゆするの手をビクテ、身体を起こした。

戻ってきたのか、俺は……。

唇を噛み締める。

「直ちゃん、大丈夫？」

心配そうに覗き込んできた数久に、無理矢理に笑顔を返したもの、悔しくつて仕方ない。

結局、何もできなかつたのだ。

俯いた直久の手に、そつとゆするが手を重ねる。びっくりしてゆするを見ると、ゆするは直久の握り固められた拳を自分の手で包み、そつと胸の高さまで持ち上げる。

その拳の中に異物を感じて、直久はゆつくりと手を開いた。

「ああ」

ため息が漏れた。

こんなに錆び付いていただろうか？

あの部屋の鍵が直久の手に静かに収まっていた。

直久は再び鍵を握り締めると、呼び止める声を無視して駆けだした。

早く、早く。階段を駆け下りて、あの部屋に。

一刻も早く、あの部屋に　彼女の元へ急がないと！

直久は例の扉の前で一旦足を止めた。鍵を持つ手が震える。力チツ。

鍵が開く。直久は一呼吸付いてから、扉をゆっくりと開いた。

あれから、いつたい、どれほどの月日が流れたのだろう？

彼女は、ずっと、ずっと、直久を待ち続けていた。扉の内側には、何度も何度も引っ搔いた痕があり、剥がれた爪が扉に刺さっていた。至る所にある黒ずんだシミは血だらうか？

扉のすぐ側で、彼女は力尽きていた。

ボロボロの布を纏つた一体の人骨の脇に直久は膝を着いた。

「アヤメさん。長く待たせて、ごめん。……ほんと……ごめん」

そう言つたきりで、もはや直久の口から出てくる言葉はなかつた。ただ、涙だけが。

「本当に、ありがとうございました」

何度も繰り返し頭を下げるオーナーに、優しく首を振る数久。

「もう大丈夫だと思いますが、また何かありましたら、いつでもおっしゃってください」

ベンションを覆つていた影もすっかりと晴れ、紫緒の意識も取り戻されて、万事解決したわけだが、なんだか、すつきりとしない。

旅行鞄を片手で抱ぎながら、直久は眉間にしわを寄せ、数久に振り向く。

「数、ちょっと聞きたいんだけどわあ～」「何？」

直久は、自分だけに起きた体験をゆずると数久に話し聞かせていた。すると一人は何やら納得して、オーナーに仕事を終えたことを伝えたのだ。だが、直久はちつとも納得できない。

「確認するけど、ゆずるを襲つた少女の靈はツバキだつたんだよなあ？　その理由はアヤメさんを連れ戻すこと」

「それと、鍵を手渡すためにね」

「じゃあ、紫緒さんやオーナーの妹とか、長女に生まれた娘が16歳になつたら魂が抜かれたようになつちゃうのって、それとどう関係してたわけ？」

「それは……」

数久は口元に手を持つていき、親指で下唇をなせる。

「ツバキさんもアヤメさんも、あの部屋に誰かを身代わりに入れなければ出られないと思い込んでいた節があるんだ。特にツバキさんは、アヤメさんを自分の身代わりにして時也さんと逃げようとしていたわけで、身代わりがいなければ自分が逃げたのがすぐばれてしまふという生前の思いが深い。強く思つていたことつて、死んだ後も残ることがあってね。しかも、不完全な記憶として残ることが多くて、ツバキさんの場合、怨靈となつてしまつたから、アヤメさんをあの部屋連れ出すためには、他の誰かを身代わりに入れなければならぬと、強く思い込んじやつたみたいなんだ」

「要するに、ツバキはアヤメさんをあの部屋から自由にしてやりたくて、身代わりに紫緒さんたちの魂を部屋に引き込んだってわけだな」

「そう。だから、直ちゃんが扉を開けたとたん、いくつもの魂が部屋から解放されて、飛び出て行つたのが見えたよ。紫緒さんも同じ頃、意識を取り戻したしね」

直久は、ふーんと頷くと、一息付いて、

「あとさあー、火傷の傷がアヤメさんにもあつたのつて？」

と、尋ねた。すると数久は眉を歪ませた。

「それは、双子の神秘としか言いようがないね。やっぱりね。一人一人別々の人間と言つても、元は一人の人間として生まれてくるはずだつたのだから、どこかで繋がつてゐるんだよね。よくあるでしょ。僕が気分が悪い時、直ちゃんまで気分が悪くなつたりするのつて。直ちゃんが怪我したところと同じところに、僕自身は覚えがないのに傷が付いてるとか……」

「あるある、あれ不思議だよなあ～」

「同じことが、ツバキさんとアヤメさんに起つたんじゃないかなあ？」

数久は少し俯く。

「そんなことがあるから、自分たちが同じものだなんて思つてしまふんだよ。だから、ツバキさんはどうしてもアヤメさんをあの部屋から出したかつたんだね。アヤメさんがあの部屋に閉じ込められているうちには、自分までも閉じ込められてしまつているから」

ツバキのそんな想いが何人もの少女を犠牲にしたのだ。

直久は黙つて、数久の肩に優しく手を置いた。

オーナーと話を済ませたゆづるが、怠そうに、鞄を担ぎながら双子の方に歩み寄つて來た。

無造作に突つ込まれた茶封筒がコートのポケットから覗いている。「行くぞ」

擦れ違ひざまに短く言つて、ゆづるは先に玄関をくぐつた。追つて直久と数久も外に出る。

直久が銀世界の眩しさに目を細めた時、妃緒が三人を呼び止めた。振り返ると、妃緒の後ろに日本人形のように綺麗な少女が静かに立つてゐるのが見えた。

ドキッとして、直久はその少女を見つめる。すると、しつかりとした瞳で見つめ返される。

「お姉ちゃんが直久さんにお礼が言いたいんだって

「お礼？ 僕に？」

人差し指で自分を指すと、紫緒さんは「クリと頷き、すーっとあの鍵を直久に差し出した。

「これを。どうか、直久さんがお持ちください」

「だけど」

「忘れないで欲しいのです」

直久がまごまごしているうちに、紫緒は無理矢理、直久の手に押しつけた。そして、微笑んだ。

眩しいほどに綺麗で、可愛らしい。

「あれ？ お姉ちゃんつて、直久さんと数久さんが見分けられるの？ ちゃんと二人を見分けられるのって、ゆずるさんくらいかと思つたわ」

そう言えば、紫緒さん、今、まっすぐ俺のとこ来たよなあ。普通、初対面の人は俺と数つて、絶対どっちがどっちなのか分からないんだけど。

紫緒はクスクス笑う。

「やあね、妃緒ったら。全然違つじやない。見分けるも何も、直久さんと数久さんは別の人ですもの。ねつ、ゆずるさん」

急に話を振られたゆづるは、紫緒を一瞥しただけで、無言で眉を顰めた。

それから、二人は何だかんだ言つてバス停まで見送つてくれた。一時間に一本、しかも午後2時が最終便だという、末恐ろしい田舎のバスがちんたら走つてくる。

それを横目にしながら別れを言い交わした。

バスが止まり、ゆづるが乗り込み、続いて数久が乗ろうとした時、直久はふと思い出した。

「そう言えば、舜さんは？」

その言葉に驚いて、数久が振り向く。

「直ちゃん！」

はつ、として妃緒の顔を見る。すると、妃緒は今にも泣き出しそうな顔をして直久を睨み返す。

93

「やつぱり、お兄ちゃんは死んでいたのね」

「どうやら山の神は妃緒に本当のことを話したらしい。しばしの間、舜の身体を借りていいだけだということを。

紫緒の意識が戻り、舜の望みが叶えられた今、山の神は舜の躰を返さなければならぬ。

もつとも、死体にずっと憑依するといつのは無理な話だった。死体は時と共に朽ち果ててしまうものだから。

そう思つて、思い返してみれば、少し腐つたような臭いがしていった気がする。

「でもね、本当は知つてたの。ちゃんと分かつていたのよ。ただ認めたくなかっただけ」

妃緒は目を細めて、いたずらっぽく笑つた。

「それには、けっここう好きだつたの」

「へ？」

「山の神様」

ふふっと笑つて、妃緒は続けて、

「この辺りが栄えていたのつて、山の神様がいたからだよね。山の神様を山に閉じ込めていたから、この辺りが栄えていたんでしょ。自分たちの都合で閉じ込めた神様を慰めようとして生け贋を考えたわけで、生け贋を出さなくなつた今、神様はさびしいのよー」

と、言い切つた。

「確かに、いくら舜さんに命を捧げられたからつて、そんそん気軽に住処を離れたりしないね、普通は。靈とかもそうだけど、思い入れが深い場所 神様の場合は社だけど、そういうた場所から離れることを嫌うものなんだよ。寂しかったのかもね」

数久がそう言つと、そうでしょ！ と妃緒は、瞳をきらきらと輝かせた。

「だから、私が慰めてあげることにしたの！」

「ええ？ まさか、妃緒ちゃん生け贋になるんじゃ……」

「べつに生け贋だけが慰める方法じゃないでしょ？」

妃緒は驚きの声を上げた直久の目先に人差し指を突き立てた。
「約束したの。あと一年したら、お嫁さんになつてあげる、つて
ズルッ。

直久の肩から鞄がずり落ちた。

「ま、まじでい？！」

「本気よ。だつて約束したもの。そしたら、もつ生け贋の必要なく、
村も荣えるじやない？」

「いや、そうかもしれないけど……。だつて……マジ？」

直久が腑に落ちない顔をしていると、バスの窓を大きく開けて、
顔を出したゆづるが、

「良い考えですね」

と、につこり。

「つでしょ！　さすが、ゆづるさん！」

絶句。

そうか、ゆづるにしろ、うちの家系の奴に、異種間結婚に偏見がある
あるような常識的な奴はいない。

つーか、違和感すら感じないような奴ばっかなんだな。

「ほら、直ちゃん。早く乗つて」

いつの間に乗り込んでいた数久が、バスの中から呼んでいる。
妃緒のことがまだ引っかかるが、仕方ない。じゃあ、と短い別れ
を告げて一人に背を向けると、あわてて紫緒が直久の袖を掴んだ。

「また来ていただけますか？」

振り返ると、必死な瞳と会う。

「もちろんですよ。お困りでしたら、いつでもどうぞ。お呼び立て
ください」

おちやらけて答えると、紫緒は直久の袖から手を離し、ゆるやか
に首を振った。

「仕事ではなく、思い出した時に、会いに来て欲しいのです
直久がバスに乗ったのを確かめて、バスの扉が閉まる。ガタガタ
と重そうに走り出した。

「ずっと、待っていますから。今度はちゃんと待っていますから…

…」

遠く、小さくなつていいく紫緒の姿を直久は、それが消えて見えなくなつてしまつまで、田で追い続けた。

青空が広がるその下で、真っ白い雪が静かに横たわり、赤い椿の花が直に咲き乱れようと蕾を大きくさせている。

【完】

9・青空が広がるもので（後書き）

『春眠』 (<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>) へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5907d/>

寒椿

2010年10月8日14時49分発行